

60  
799

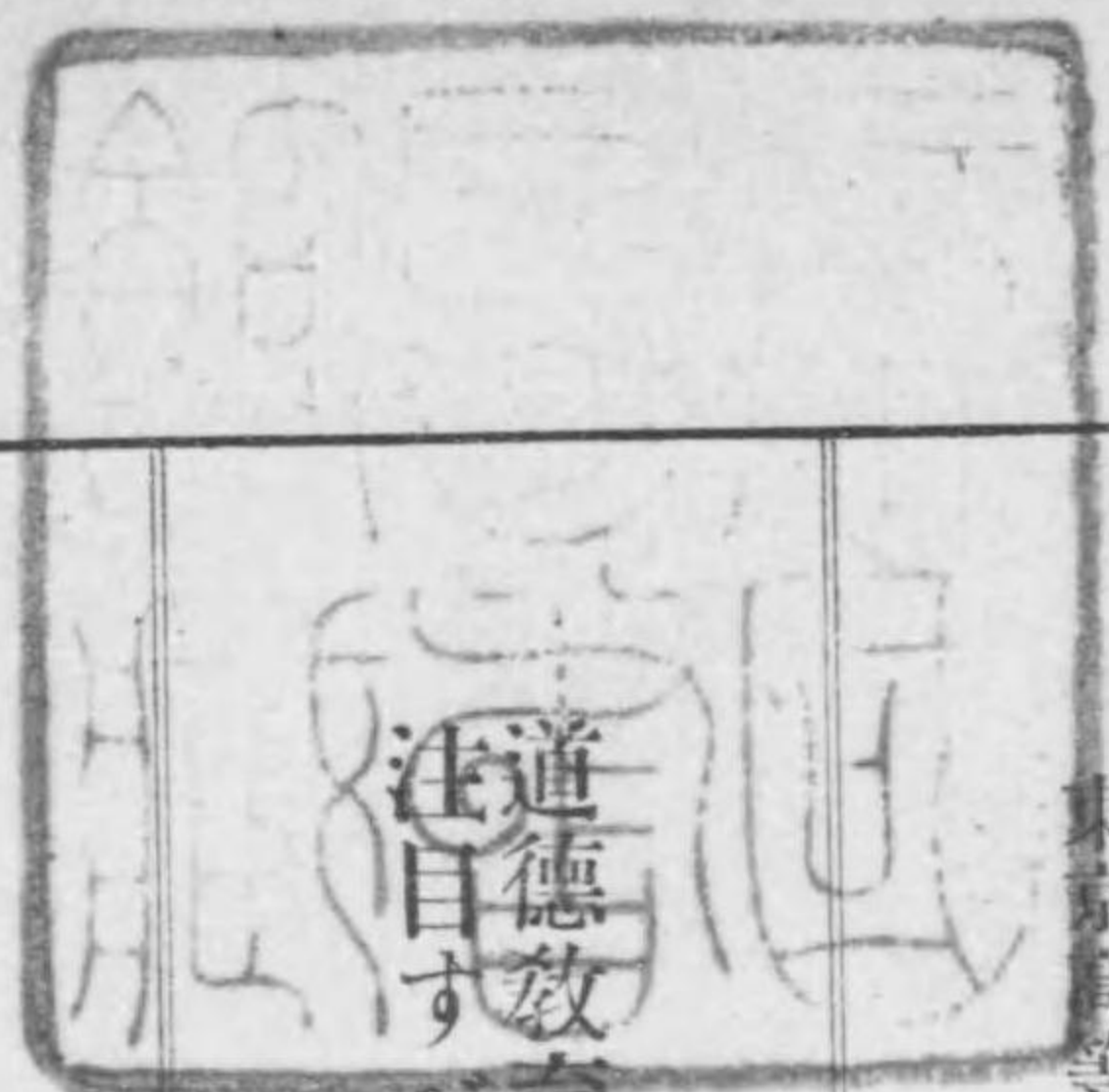


始





IF2Q9



注  
目  
す  
べ  
き  
道  
徳  
教  
育  
上

性教育の問題

東京高等師範學校教諭 原 房 孝 著

東京 明治圖書株式會社

大正  
14.8.17  
丙 亥



60-799

60  
799

序

今日までの我が國の状態を考へて見ると、政治經濟學術宗教などを始めとして、萬般のことが大抵歐米の模倣に傾いてゐるやうな氣がしてならない。特定の國家の特殊の使命といふことを堅く信じてゐる私には、どうしてもこれでは我慢が出来ない。もしかやうな状態で何時までも過して行くとしたならば、我が國は結局歐米諸國の半屬國のやうな位置に立たねばならなくなるであらう。

教育は國民精神の涵養啓發に於て、實にその根本をなすものであるが、これに於ても、また前述のやうに模倣的傾向が著しく、



従つて何か新らしい學說や方法が輸入されると、たゞそれを真似ることだけにだけ心を傾けて、その説の是非を判定し、我が國民に適用し得るか否かといふやうなことは、深く考へないといつてもよいやうな有様である。かやうな傾向は、時としては意外に善い成績を擧げ得ることはあるかも知れないが、それは偶然であつて、大體に於て、失敗に歸するものである。そしてつまりは、神聖なるべき教育を攪亂し墮落せしめることになり、國民精神を不安、動搖の淵に陥れるに至るものといつてよいのである。

こゝに私の問題としてゐる性教育に關する思想の如きも、また事實に於て、かやうな弊害を示しつゝあるのである。この問題が社會一般に知られ始めたのは、まだ極めて近頃のことであ

つて、その理論に於ても、その方法に於ても、まだく講究されねばならぬ點が、數多くあるのである。然るに、例の氣の早い人々は、盛んにこれを唱道し、實行し、甚しきは、健實なる態度を持するものを目して、時代後れと嘲るやうな傾きがないでもない。従つて、十分の信念を持つてゐないものは、知らず識らずそれに引き込まれて行き、基礎のない建築を組立てようとする仲間となつてしまふのである。

私は、正善なることを行ふに於ては、決して人に後れをとるものではない。併しその方法は、飽くまでも慎重でなければならぬ。殊にそれが、國民精神の根本に關するやうな教育事項に於ては、尙更である。私は性教育の問題が、我が國の道德教育に影



響することの極めて重大なるを認め、またこれが取扱ひをや、もすれば輕卒に附せんとする人々の少なからざるを知り、こゝに本書を公にした次第である。故に私の態度は、能ふ限り慎重である。そしてこの問題に對する無批判の反對を退けると共に、無條件の賛成や實行をも否認しようと思へてゐる。

かやうなわけであるから、本書に於ては、出来るだけ、主觀的の主張をすることを避けた。そして從來行はれてゐる諸種の説を出来るだけ多く客觀的に記述した。公平な判断を得たいからである。勿論、時として、自分の説の混入することのあるのは、止むを得ないところである。併し本書は、多くの書物の單なる抜き書きではない。これを組織したのは飽くまでも私である。

本書は、考へるところがあつて、わざと純學術的態度を避けた。いはゞ通俗的に書いたつもりである。幸にして本書が、幾らかにしても、世の多くの人々が、性教育の概念を公平に定める助けともなり得るならば、望外の幸である。

最後に本書を組織するに就いて、多くの暗示と助力とを或は直接に、或は間接に與へてくれた先輩や友人に對して、心からの謝意を表し、併せて、且つ本書が、私が先きに書いた「少年の犯罪とその豫防」の姉妹篇であることを附記しておく。

大正十三年四月廿四日

西巢鴨の寓居にて

著者しるす



道徳教育上  
注目すべき  
性教育の問題

目次

第一 教育改造の一契機……………(一)

第二 性教育に對する私の立場……………(一六)

第三 性慾と人生及び道徳教育……………(二三)

第四 名稱の問題……………(三三)

第五 性教育の意義……………(三六)

第六 性教育を必要とする理由……………(四九)

第七 性教育の歴史及び現在……………(七三)

第八 性教育の方法に就いて……………(九五)



第九 性教育の難易に關する説……………(一八二)

第一〇 性的抑制の必要とその能否……………(一八八)

第一一 性的行爲の具體的事例……………(一九九)

道徳教育上  
注目すべき  
性教育の問題

原 房 孝 著

教育改造  
の一契機

第一 教育改造の一契機

私は我が國の教育界には、そのまゝに捨て、おくことの出來ない二つの大きな缺陷があると考へてゐる。その一つは、主として形式方面に關するものである。皮相的に考へると、我が國の教育の系統は、まことによく整つてゐるやうに思はれる。

小學校から大學教育に至るまで、如何にも秩序が整然として

缺陷の一



あるやうに見えるし、またその他の専門教育や職業教育にしても、まづ大體に於て形式は、整つてゐるといふことが出来るであらう。併し、一步深く立ち入つて、それ等の間の統一または連絡といふやうな點に就いて、その實際を調べて見ると、不満足の點が多くあることに、何人も氣が附くであらう。

例へば小學校と中學校との間、または中學校と高等諸學校との間などに、どれほどの調和があり、どれほどの連絡的研究があるか。なるほど、小學校卒業程度の學力があれば、中學校入學の資格があるとは定めてある、また中學四年或は五年終了者は、高等諸學校へ入學し得るとはきめてある。併し、肝心な小學校それ自身と、中學校それ自身及び中學校自體と高等諸學校自體と

の間には、何等の具體的な連絡ある研究も出来て居らないのである。約言すれば、低い程度の學校と高い程度の學校との間には、儼然たる階級的障壁があつて、これ乗り越えての相互的扶助、または相互的研究などいふものは、まづ全然ないといつてよい程である。尤も考へ様によつては、これに似たやうなものがないことはない。

例へば夏期講習とか冬期講習とかいふ長期間に亘る講習會や、極めて短い間の講演會とか、教育視察及びこれに伴ふところの簡單なる指導といふやうなものがそれである。そして、大抵かやうな場合には、所謂名士といふ人々を聘して高説を拜聽する。如何にも結構なことに相違ない。またこれによつて、或る



種の刺戟を受けて、裨益するところも少なくはあるまいと考へることも出来るであらう。故に、私は、これに對して根本的な反對を表するものではないが、たゞこれだけやればそれで十分であるかと考へたり、またこれによつて、教育上の所謂上級下級學校間に於ける連絡や研究がよく出来るものであると考へることには、不賛成を唱へざるを得ないのである。

殊に所謂名士の間にも、随分いかゞはしい人もあつて、専門の知識——それも、多くは外國の書物が讀めるといふ、たゞそれだけの理由で、吸収し得にお借りものゝ知識——に於ては、一應認め得る程度のもを貯へてゐるとしても、さて大切な小學校なら小學校、中學校なら中學校といふものに對しては、具體的研究が少

しも出來て居らないなどいふものもないではない。引く所は多く外國の例、いふ所は、殆んど全部抽象的な難澁な哲學的語句の排列、而してその結論は曰く「小學校教育はかくくであるべきである。中學教育はしかくくならざるべからず」と。天下にかくの如き馬鹿げた話がどこにあらうか。もしかゝる所謂御高説を拜聽して、一から十まで成る程と考へ、空虚な形式的語句を金科玉條と尊んで、兒童や生徒に臨んだとしたならば、これほど危険なことも、また世にあまり多くあるまいと考へられる。

小學校教育に對する基本的研究のないものは、小學校教育に就いて、云爲する權利は全然ない。あり得ない。中等諸學校に關し



ても、また同様のことがいへるのである。

更にまた、小學校の教育者が、中等學校以上の教育者を集めて講習會を開いて、その所存を開陳するといふ試みは、私の寡聞の爲か或は實際にないのか何れだかわからないが、未だ曾て聞いたことがない。併し、考へて見ると、小學教育は爾後一切の教育の根底をなすものである。

小學校に於ける研究を、それ以上の教育に従事するものが、十分に理解して置くことは、極めて大切な事項である。然るに、現代の我が國に於ては、全然とはいへないまでも、まづかやうな試みはないといつてよいのである。否、なかることをいふのでさへ、すでに容れられない状態である。「失敬なことをいふ奴だ」

と、大目玉を頂戴せねば濟まないやうな險惡なけは、ひが漂つてゐる。これと同様のことが、また中等學校の教育者と、高等諸學校の教育者との間にもいひ得るであらうと思ふ。

要するに我が國の現状は、形式上は如何にも整頓したやうな教育制度をもつてゐるが、その制度の内に突き込んで考へて見ると、初等、中等、高等の三大教育は、窓のない割據の有様を呈してゐるといふことが出来るであらう。

私の第二の不満は、主として、教育の研究方法に關するものである。第一の缺點を形式に關するものとするならば、これは、内容に關するものと見ることが出来るであらう。それは、教育に關する學說にしても、實際にしても、多くは、演繹的見地に立つて



るて、歸納的傾向の乏しいといふことである。我が國の児童や生徒、少なくとも自分の児童や生徒の實際——心理的にも生理的にも——に即し、具體的實驗から歸納した研究のないことである。「外國ではどうであつても、自分の永い間の經驗や研究からは、どうしても、かく／＼でなければならぬ。都會はどうであつても、田舎に於ては、しか／＼である方が、更によい」と斷言し得るやうな、確かな研究の乏しいことである。

換言すれば、教育に關する科學的研究の缺けてゐるといふことが、何といつても、現在の我が國の教育界の有様であり。従つて、不滿の對象とならざるを得ないところである。固より、外國の事例を參考とすることは、いふまでもなく必要であらう。ま

た哲學的見地よりする演繹的學說も、缺いてはなるまい。併しそれは唯一の教育方法の根據ではないのである。教育といふ如き實際的活動に於ては、寧ろ、被教育者の實際生活から歸納した、經驗的方法を、大いに加味せねばならないと考へざるを得ないのである。

この二つの缺陷とそれに対する不滿とは、私の心の中に、絶えずこびり附いてゐるものであるが、恐らくは、教育に關して心を用ひる人の、均しく首肯し得られるところであらうと思ふ。この不滿は、我が國の教育が根本的に改造せらるゝに非ずんば、決して消え去るものではない。根本的改造とは何であるか。私は、前述のことから次の如くにいふ、曰く「あらゆる種類や程度の



學校が門戸を解放して、實際的に相互に連絡ある研究をすること。教育の方法を出来るだけ歸納的にすること」即ちこれである。これに關しては、一つの法令も必要ではない。實際教育者がたゞ進んで行へばそれでよいのである。固より従來の行きが、より上、色々の困難はあらう。併しその困難は、決して打ち越え難いものではない。

ヨーロッパを中心とした世界大戦の齎した改造思想は、社會の百般の方面に及んでゐるが、特に教育的方面に見るべきものが多くある。大戦以前の世界の趨勢は、何といつても、誤まられたるダーウイニズムの自然淘汰適者生存乃至競争主義の傾向であつた。これが社會の一切の行動を、意識的にせよ、無意識的

にせよ、とにかく支配してゐたのである。世界大戦は、この考へ方の傾向の、極端になつたことから起つたといつてもよい程である。然るに大戦を一機として、この考へ方は俄に變つてしまつた。「相互扶助」「普遍的奉仕」の傾向の現出がそれである。そしてこの傾向は、現在の全社會を風靡してゐるといつてもよい。殊に戦争で苦んだ程度の多い國ほど愈々盛んである。

ドイツに於ける教育改造、フランスに於けるそれは、實によくこれを證してゐる。私が今、我が國の教育的改造を叫んで、學校間の門戸の解放を主張するのも、またこの傾向の中から生れて來たものであるといつてもよいのである。固より悪いことなら、世の風潮に従ふ必要はない。併し、學校間の相互扶助や普遍



的奉仕は、どう考へても、悪いことゝは思はれない。

殊に私の喜びに堪へないのは、教育方法の科學的、具體的になつたことである。ドイツのやうな理想主義の國で、——如何にもその理想主義であることは捨て去らないにしても——教育方法が哲學的見地から、科學的見地に變つたといふことは、争はれない事實である。例へば、フロイドの性の理論に關する論文が、世の視聽を動かして、これに關する教育的研究の起つたこと、被教育者の日記を基礎とし、これを檢して、彼等の心的生活を知らんとする研究などが、最近極めて盛んであるが如きは、これを示して居るであらう。(これに就いては、Educational Review, September, October, 1922. に詳かに載せてあり、私は、雑誌「教育研究」の

二百四十九號及び二百五十四號に拙譯を載せておいた。またアメリカに於ては——大戰以前から、幾分かさうではあつたが、——大戰後は殊にこの傾向が盛んになり、教育——教育學ではない——の科學的研究、道德教育の科學的研究などが、極めて多く現はれてゐる。

例へばチャールズ——ハバード——ジャドの「教育の科學的研究序説」(Charles Hubbard Judd; Introduction to the Scientific Study of Education) や、イー・ヒー・カークパトリックの「科學的倫理學」(E. A. Kirkpatrick; Scientific Ethics) ——これはまだ書物になつてゐないと思ふ) などが、それである。我が國に於ても、これ等と同様な傾向が、全然ないといふのではない。ぼつ／＼改造の氣運は



動いてゐるのであるが、まだ／＼とても問題とするに足らない程度のものであらう。

私のこゝに述べようとする「性教育の問題」は、その性質上、決して小學校だけで出来るものでもなければ、また中學校や女學校乃至高等諸學校のみで、單獨に出来る研究でもない。これを徹底的に明らかにしようとするには、これ等のすべてが協同しなければならぬ。勿論、その他の社會からの助力は必要であるが、少なくとも、各種各程度の學校相互の協同的研究は、缺くべからざるものである。また、どうしても、この研究は、具體的事實被教育者の實際の性的生活を基礎とせねばならぬ。抽象的理論は、まづ大した價值はないといつてもよい。従つて私は、こ

の問題の完全な研究は、それ自身として、極めて重要な價值あることであるのは勿論であるが、更に、私達の認めてゐる教育界の二大缺陷をも消し去り得て、我が國の教育の根本的改造を將來する一大契機であると考へてゐるのである。

學校及び寄宿舎は、不正事の教育所なり。學校の教科について重大なる事件は、この不正事なり。しかも生徒が、肉體的並に精神的に、日に墮落しつゝあることは、何人も注意を拂はず。

——クラフト—エビング——



## 第二 性教育に對する私の立場

私は性教育に關する具體的論述に入るに先立つて、一言この問題に對する私の立場を述べておきたいと思ふ。從來の考へ方から見ると、性或は性慾などに關して、何事かをいふことは非常にいまはしいこと、思はれ勝ちである。

殊に教育者がこれに就いて云爲することは、教育の神聖を穢すもの、その教育者は墮落したものであるとさへ見做されやすいのである。如何にも教育は神聖であるべきである。教育者は品性の高潔なものでなければならぬ。併しながら、性或は性慾の問題を論ずることは、即ち教育の神聖を穢すこと、その人は

墮落したものであると直ちに断定することは出来ない。性慾の放肆は穢れである、墮落である、いむべきことである。また人生に於けるあらゆる危険の根本である。併しこのことから直ちに性慾そのものを穢れとするのは誤りである。坊主と袈裟とは、どこまでも區別して考へねばならぬ。

否、な、恐るべき危険を伴ふが普通であると考へること、そのことが、やがて、神聖なる科學的研究を行はねばならぬことを、明らかに示してゐるといつてもよろしいのである。性慾を穢れとするものは、まづ第一に、自分がどうして生れて來たかを考へて見るがよい。第二には、さう考へてゐる自分の小さな子供達が、日常、どういふ生活をしてゐるかを觀察するがよい。或る人は、



「親といふものは、自分の子供を知らない。子供の知つてゐることをまるで知らない。親が傍にゐない時には、子供等が何を話してゐるか、何をしてゐるかまるで知らないのである」とさへいつてゐるのである。

併しながら、私は、今日の所謂「性慾學者」と同様な考へ方をしてゐるものではない。彼等の言動は、彼等が誇りげに考へてゐるほど、價値のあるものではない。勿論、いふ所に一應の眞理はある、併し大體に就いて、特に教育的見地から論ずれば、無邪氣なる幼童をして、邪惡を行はしむる直接の動機となるやうな言動が決して少なくない。慎しむべき性慾を、却つて放肆ならしめ、墮落への路の導火線となるやうなものも少なくない。虎を

私の立場

馴さんとして、却つて嚙まるゝの類である。今日唱へらるゝ性教育論者の中には、かゝる傾向のものが頗る多いことを看過してはならぬ。

以上挙げたのは、共に相反對する兩極端である。そして、私は、その何れにも加擔することが出来ない。そも、私がこの性教育に就いて注意を向け始めた動機は、實は、性教育そのものを組織的に研究しようとする點にはなかつたのである。私の主として研究したいと考へてゐたところ、また現にゐるところは、道德の本質、道德教育の方法である。今、主として後者に就いて考へて見るに、我が國の過去及び現在に於ける道德教育は、如何なる立場にあるであらうか。今更ら、事新らしく論ずるまでも



なく、實際に於て、行きつまつてゐるのである。これが前途の展開といふことを目的としてゐると見らるゝ公民教育的思潮が、明らかに、而も力強く、これを證明してゐるではないか。スタンリー——ホールはいつた。「今日、米國諸學校に於ける倫理の教授及び研究の方法を、單に論辯的、歴史的、抽象的のものとなすの學風に對し、最も熱心なる反對を表せんとす。

見よ吾人の目前に、犯罪てふ顯著なる實物のあるあり。苟も倫理の研究に従事せんとするものは、宜しく先づ此處に其の出發點を求め、その研究をして罪惡と道德との熱烈なる戰線に密接せしめて、これに一層多くの血と肉とを附與するを要す。而して後に、能く豊富なる事實の石を舗きつめられたる平坦堅固、

砥の如き大道の上に、徐々として研究の歩を進め、以て行爲の哲學てふ一層高大なる階段に到達するを得べきなり」と。至言といはねばならぬ。道德教育の方法が、前にもすでに、教育一般に就いて私の述べた通り、またホールのいふが如き傾向をもつてゐなければならぬこと、もしこれをもたないやうな方法——我が國の従來の方法は、大體さうであつた——は、必ず行きつまるべきであり、效果の薄かるべきものであることは、何人も容易に理解し得るところであらう。

私は嘗て、少年や少女の不良行爲に就いて、貧しいながら一通りの研究を行つた。そして、ホールの言の的確なるを明らかに知ると共に、更に、彼等の性的生活に就いて、ホールと同様なる言



をなすことの誤りでないことを覺つた。即ち私の性教育に関する研究の動機は人間の性的生活の具體的知識を得て、これによつて、一般教育上特に道德教育上如何なる方法を取るべきか、道德と性慾とは如何なる具體的の關係あるかを知らうとするにあつた。また現在に於てもその通りである。

併しながら、この論文は、これ等の點を明らかにするのが主眼ではない。固よりこれ等にも觸れるではあらうが、主なる目的は、所謂性教育の概念は如何なるものであるか、またあるべきであるか、これに對して、教育者は如何なる立場をとるべきであるか等を明らかにしようとする點にあるのである。

### 第三 性慾と人生及び道德教育

性慾は、我等人類が明白にもつてゐるところの本能である。たとひ、或る人々のいふが如く、穢ららしいものであると考へたところで、人類がもつてゐるといふ事實は、どうしても否定することは出来ない。のみならず、これは、人類が永遠に繁榮することに關して、根本的重要さを有する本能である。性慾のなくなつたときは、人類の滅びるときでなければならぬ。

従つて、如何なる程度に於て、そこに人事現象の存する以上は、他の本能や欲望と共に、必ずこの本能を伴つてゐることを忘れてはならぬ。家族生活、社會生活、個人衛生、社會衛生、宗教、藝術



術・政治・經濟・教育など、一つとしてこれを度外視して正當であることは出来ないのである。「犯罪の裏面には女がある」といふことは、男を主としていつた發表ではあるが、更に一般的に解釋すれば、犯罪と性慾との不離な關係をいひ現はしたものと見る事が出来るのである。

かやうなわけであるから、性慾を無視し、または無視せんとして企てられるすべての試みは、結局、それ自身の定めた法則の爲に、それ自らを破壊せざるを得なくなる。私はその著しい例として、ヨーロッパの中世紀に於けるキリスト教及び親鸞以前の我が國の佛教を擧げることが出来る。兩者の間には、幾らかの相違はあるとしても、結局、何れも靈肉の別在觀に立ち、靈に生き

ようとして肉を卑しんだと云ふことは、同様であると見て差支ない。これ等二つの宗教が、かやうな立法をすることには、明らかに、或る程度の理由を認め得るのである。そしてこれに屬する僧尼が、この立法に従順ならんと努めることにも、いぢらしい程の殊勝さを見得るのである。

併しながら、かくの如くすることは、決して、少なくとも、人生の永遠に榮えるといふことを目的とする見地に立つたとき、人類全體に強要し得る一般法となることは出来ないのである。人類の絶滅した世界は、よしんば、神や佛から見れば、有意味であつたとしても、我等にとつては、何等の價値をも認め得ないものである。キリスト教や佛教の僧尼が、如實にその立法を嚴守する



ことは、結局それ自身を破滅せしむる所以ではないか。何といつても、人の試み、人の企て、人の立法は、人を本にせねばならぬ。これ等宗教家は、一方に於て彼等の立法に苦しめられると共に、他の一方に於ては、人として——生きたる人として——残酷なるさいなみを受けた。そして、遂に彼等は、人としてのさいなみに打ち勝ち得ずして、彼等の理想とする立法を蹂躪したのであつた。

而もその蹂躪した方は、人性と矛盾した立法の爲に、極端に悪化されて、中世紀——我が國に於ては親鸞以前——の僧尼の生活を書し出したるものを讀む人をして、長嘆息を禁ぜしむる能はざる状態に立ち到つたのであつた。即ち彼等は、彼等の立法

に對して、墮落破戒の憎むべきものとなつたのみでなく、たゞの人間としてさへ、許し難い罪を犯すに至つたのである。宗教それ自身からいへば、自ら作つたわなに陥つて、我と我が身を滅したのである。ルイテルや親鸞の偉いところは、神や佛の宗教を、自分達人間の宗教とした點にあるではなからうか。人間の宗教に於ては、性慾を無視したり禁絶したりすることを絶対に許さぬ。

次に性慾と道德教育との關係に就いて簡單に考へて見る。私は、この場合に於ても、道德を以て、人の道德と考へることに躊躇しない。故に、個人または社會を毀損し、破壊し、或は滅亡せしむるが如きものは、眞の道德とは考へない。固より、道德それ自



身の價値は十分に認める。故に道德を方便とすることには、絶對に反對せざるを得ないが、併し、道德は飽くまで人生の道德でなければならぬ。人生の道德とは何をいふか。曰く、個人と社會とを健全に發達せしめ、その豊富なる幸福を將來し、永遠の繁榮を樂しましむるところの、而してまた、人性に全き基礎をおく人間本來の規範をいふのである。

道德教育の目的は、被教育者をして、これを自覺せしめ、これを實踐せしむるにある。約言すれば、理想的の人を作るにある。反面からいへば、彼等をして、人間の理想を實現せしめんとすることを主要なる目的とする教育である。而して人間の理想とは私の解するところに従へば、我等人類のもつてゐるところの

慾求の統一體をいふのである。これはいふまでもなく、人を統制する原理となるべき筈のものである。

我等の慾求は殆んど無限であるといつてよい。時に應じ所に従つて千變方化するところのすべてを、枚擧することは到底出来ないが、その中に性慾のあることは、何人と雖も否定することは出来ない。而もこれは、すでに述べた通り、最も強い慾求の一つであるのである。道德教育の目的が、被教育者をして、人間の理想を實現せしむることを、主要なる目的とし、而してその理想なるものが——勿論前記の外に色々の考へ方はあるが——慾求の統一體であるとしたならば、更にまた、その慾求の中に、性慾といふものが明らかに存在してゐることを認容した以上は、



性慾を無視して、道德教育の目的を達することは、どうしても出来ぬことになるのである。もし敢てこれを無視して、突き進んで行くとするならば、私は、道德に於ても、また、改革される以前の宗教と同一なる失敗を繰り返さねばならぬと、斷言して憚らない。従つても、しかくの如き道德教育が盛んであり得るならば、換言すれば、被教育者がかくの如き道德教育を餘計に受ければ、受けるに従つて、彼等は愈々人としての本然の道からそれて進んで行くことになるであらう。而して、結局、かくの如き道德教育は、道德自身を破壊し終らねばならなくなるのである。

従來の我が國の道德教育が、全然かくの如きものであるとはいはないが、少なくとも、かゝる傾向の、幾分にせよ、認めらるゝも

のであつたといふことは、遺憾ながら、否定し得ないところである。今や、我が國の教育界全體の改造を望む聲は、少なからず擧げられてゐる。道德教育も、また當に改造せられねばならぬ時機に到達したのである。

感覺を以て靈魂を裏切ることなく、同時に、  
靈魂を以て感覺を裏切ることはない。

—— ジョルジサンド ——



第四 名稱の問題

私の所謂「性教育」といふものと大同小異の内容を有するものと考へられるものであつて、而も色々の異つた名稱をこれに附けてゐるものがある。「名稱などはどうでもよい」といへばそれまでとあるが、併し、何の考慮をもせずして、時により所に従つて同じことを、同じ人が、別々に發表するといふことは考へねばならぬ。

人の誕生の場合を考へて見ると、初は命名するに苦んで、色々考慮する、そして一番よいと思はれる名前をつけるのと同じやうに、性教育も誕生後間もないので、今、命名に悩んでゐると考

へてもよい時である。併し、人を呼ぶのに、或は太郎といひ、また次郎と稱へることを許されないと同様に、この問題に於てもとにかく自分として、一定の名稱を附しておくことが必要である。私のこれに關する研究は、極めて淺い。従つて、参考書の如きも、恐らく五十種を越えてはゐまいと思ふ。貧弱ではあるが、その乏しい材料から得た各種の名前を次に掲げて見よう。

- 一、性慾教育。これは中々多く用ひられてゐる。私も以前には、かやうに呼んでゐた。
- 二、性の教育。例へば小西重直博士や左近義弼氏の如きは、かやうに呼んでゐる。
- 三、性的教育。これも少しは用ひられてゐる。



四、性教育。これが今日では、一番多く用ひられてゐるやうである。私も昨年頃から、これに決定してゐる。

また外國でも、人によつて、色々に用ひられてゐるやうである。今一例をあげると

I. Sex Education.

II. Sexual Education.

III. Sexuelle Erziehung.

などがある。これ等の、何れが善くて、何れが悪いかといふことは、直ちに断定することが出来ない。その内容によつても、自然と相違を來すものであるから。とにかく、我等としては、自分で新らしく造り出すことを別として、この中の何れを選ぶべきか

を決める必要があるといふことを指摘するに止めておく。

近時、性的要素を偏重するに至らしめた理由は、從來性的のことをいふのを遠慮してゐた臆病に對する反動であり、また人生の重大なるこの一面を觀過してゐたことに對する反抗であるのである。

——— リーバース博士 ———



### 第五 性教育の意義

性教育とは、何を教へることを目的とすべきかといふ問題が、性教育に關する研究の中心點となる。今は暫く、「意義」といふ言葉を、かやうに解して論述を進めて行くことにする。これに關する主張は、随分澤山にある。その中の主なるものを次に掲げて参考に供しよう。

一、性慾教育は、疏水工事である。性慾は壓迫して壓迫しきれぬものではない。性慾には善惡の二大流が相混じてゐる。惡流は合理的方法でこれをせきとめ、善流はこれを啓發して健全なる方向に導かねばならぬ。そして(一)性慾及び性的生活は、罪

惡ではない、あらゆる生物の自然的及び生理的必要事であること。(二)併しこの行動は、人間に對して精神的及び肉體的に、大なる危険を伴ふものなることの二つを教へ、なるべく少年の性慾生活を健全に發達せしめて、春機發動期を延長せしめ、性的行爲を結婚期まで、絶對に禁止するの、本來の目的である。

二、性慾教育の使命は、身體的及び道德的素質の健全なる發達を期し、身體の養育をはかり、有害なる影響、殊に手淫に對する防禦、早期性交の抑止といふことにある。性慾教育は、その他の教育要目中に、格別の地位を要求するものではない。寧ろこれ等と一致して、完成した人格を養成せんが爲に、個人の調和的發達を期するものである。



三、性慾教育は、決して特別の範圍のものではなくて、全教育の主要なる一部をなすものである。従つて家庭並に學校に於ては、性慾衛生及び性慾道德の範圍に就いて、これを解説せねばならぬ。性的教育は決して「狹隘なる性慾教育」の範圍に於てなすことなく、衛生の普遍的法則、就中、道德及び精神の向上を期するところの、普遍的法則に於てなすべきものであるから、これを系統的に組織された形に於て示すことは出来ないものである。

四、性の教育の目的は、性本能の指導である。性本能の指導とは性本能の正しい意義を理解せしめ、その濫恣を慎ましむるといふことになる。何を教授すべきかに就いては、アメリカのコ

ロンビア大學のピグロイ教授の考へが比較的適切であらう。

(一)性的健康を保持せしむる爲に、個人的及び社會的の性の衛生を教授する。

(二)性に關して、眞面目な科學的な遠慮のない態度を養成せんが爲に、生理學をも含める廣義の生殖の生物學を教授する。

(三)人間種族の改良を來すべき性的行爲に關するもの、即ち遺傳及び優生學上の知識も必要である。

(四)性的行爲に關係ある性の倫理、性の社會學。

(五)性の健康及び行爲に關係あるものとして、性の心理も大切である。

(六)性の純潔な美的方面を悟らしむる爲に、性の美に關する教



授も必要である。

かゝる立場は、結局性に關する科學的知識及びその應用に關する教授によつて、性の啓蒙的指導を施さんとするものであつて、性本能の指導に就いては、最も積極的な態度と見るべきである。將來この運動の盛んになるに従つて、教授課程中に相當の地位を占むるものとすれば、ピグロウ氏の意見の如きは、有力のものとなるであらう。と主張するもの。

五、性教育は、兒童がこのことに關して質問する場合に、常に事實を答へ、兒童の知識を斟酌し、或は簡單に、或は精細に、説明して聽かせることである。

六、性教育は、人間の性慾生活の實際や法則を、明瞭に正確に兒

童に向つて説明することである。

七、幼い子供に男女兩性の差や、夫婦の間柄のことなどを教へるのが性の教育である。

八、性教育の要は、その身邊に襲ひかゝる不測の危険を未然に防ぐに足る科學的知識を授け、盲目的本能を制する理性の自律可能性の範圍を示し、以て生を樂しみ、進んで同胞に奉仕し得る餘力を養ふを旨としてゐる。即ち來るべき世の人類の改善を目的とする優生學の前提とすべき現世改善學の一部を構成し、應用生物學の一部門に外ならぬ。

九、性教育の重要な部分は性衛生に屬する。兒童がその性慾の發動に當つて、驚異の眼を以て、自ら性慾の研究をなすに放



任せずして、合理的の方法によつて、眞面目に性慾の説明をなすことを努めるのが、性教育の趣旨である。

一〇、種族生命の根源といふ見地から、また花柳病に關する知識を與へるといふ必要から、性に關する教育をするのが性教育である。

一一、性教育の内容は次の八項とする。(一)性の個人衛生。(二)性の社會衛生。(三)賣笑婦問題。(四)私生兒問題。(五)性の道德。(六)性の神聖。(七)結婚の問題。(八)人種の改善問題。而して、性教育若くは性衛生を單獨に取扱つて、前後の連絡を缺くのは、その目的を達せざるのみならず、却つて種々の弊害を惹起する恐れあるを以て、之を廣く性教育の一部として取扱ふべきものである。

ある。

一二、性慾の教育に就いては、ロイゼンクランツの所説が、すでに精細を極めてゐる。氏は(一)兒童の頭腦をあまり早くより刺戟し、及び有害なる感傷的小説を讀ましむることを嚴禁し、(二)熱心と明晰とを以て、生殖の秘密を知らしめ、及び高尚なる裸體畫等の美的鑑賞によつて、性慾に關する野卑なる空想を洗滌し、(三)充分なる作業を課して、精神を他に轉じ、(四)神聖なる羞耻、即ち純潔の情を養ふを以て、性慾教育の主要なる方法と認め、(五)現今に於ても、その大方針は、恐らくこれ以上に出づることは出来まい。と主張するもの。

以上、私は十二の説を擧げたが、これに就いて少し注意をして



おくことがある。それは、讀者諸君もすでに氣附かれたこと、思ふが、以上の諸説の中には、或は性慾教育、或は性教育、或は性的教育、或は性の教育などと、色々の言葉の混在してゐることに就いてある。これは決して、私が勝手に記したのではない。各各その説を主張する人の用語を、そのまゝに用ひたのである。これによつても、私が先きに「名稱の問題」のところでも述べたことが、誤りでないことを知り得るであらう。

次には、上記したやうに、明瞭に性教育の意義を説いてゐないものもある——大部分は明確に述べてゐるが——それ等曖昧なもの、前後の關係から、私が理解したところを記したものである。なほ、最後に擧げた説は、結局性教育の方法を述べたも

の、やうに考へられるが、併しその論述によつて、性教育の意義をも理解し得ると考へたから記したのである。

さて、これ等の諸説に就いて考へて見るに、少數のものを除いては、大體に於ては同じ様なことを主張してゐるやうに思はれる。併し、こゝに注意すべきことは、第三の説——これは、パッサウ氏の主張であるが——に於て、「性的教育」と「性慾教育」とを區別してゐること、及び第十一の主張——これは、大正十一年四月二十八日に女子教育大會に於て、可決した案である——に於て、「性慾教育」と「性教育」とを區別してゐることである。これ等の説を主張する人々の考へ方は、性慾教育といふ場合には、單に孤獨的な性慾に關する教育であると見做し、性的教育若



くは性教育といふ場合は、更に廣義のものであり、獨在的に性慾を見ずして、人格構成要素の一つとしてこれを取り扱ひ、その他の要素との關係調和等を考慮して、全人格の調和的發達を期することに關係する部分の教育といふやうに解してゐるらしいのである。私もかやうに考へることに賛意を表するものである。要するに、以上の諸説から、私の得たところの歸結は次の通りである。

一、性教育の意義には、少なくとも、今日までに主張されたものに就いていへば、廣狹の二義がある。

二、狹義には、單に、性慾に關する知識指導を與へんとする教育であると解し得られる。

三、廣義には、その具體的内容は幾分かの差別はあつても、その本旨とするところは、性慾の發達過程を研究し、その精神身體との關係を明らかにし、これに順應するやうな教育方法をとり——教授に於ても、訓練に於ても、養護に於ても——並に性慾に關する知識を授け、これに關して適當なる指導を與へ、これが濫用より生ずる弊害を知らしめて、性の純潔を保たしむる教育と解し得られる。

なほこゝに問題として考へられることは、性教育の意義を、更に廣義に解して、「從來不問に附せられたる性慾に關する部分を、とり入れたる一般教育」を性教育といふか、或はまた、「その取り入れられたる部分のみ」即ち前記の廣義の性教育といふ



部分だけに限らるゝかといふことである。解しやうによつては最廣義にもとれないことはないのである。併し、私は第三として述べたところの廣義に解するを妥當であると考へてゐる。而して、如何なる内容をもつべきであるかといふことに關しては、人により、また社會環境により、或は年齢乃至男女の差異など一切の事情の異なるに従つて、異なるべきではあるが、大體に於て、私もやはり、ピゲロー氏の案などが比較的良いものではあるまいかと考へるのである。我等に残された緊要な問題は、自分の子供、自分の生徒に就いての研究であり、具體的内容の考案である。これが缺けて居つては、如何なる名説を聞いても、結局無駄である。

## 第六 性教育を必要とする理由

性教育が必要であるといふことは、大體から考へて見て理解されるであらうが、更に的確にその理由とするところを知りたいと私は考へる。性教育を主張する人々は、如何なる理由を擧げてゐるであらうか。まづこれから調査して見よう。

一 子供が「自分はどこから生れて來たものであらうか」といふ疑問を、極めて幼い内に起すのは、自然的なことであつて、病的と考へるのは誤りである。もしこの疑問を起してそれに就いて質ねたとき、本當のことを、全然教へなかつたならば、子供は自分だけでいゝ加減な空想を逞うして、果ては病的な感情にな



ることがある。もしまた、その場合偽りを教へたとするならば、やがて眞實のことを知つたとき——必ず知るにきまつてゐる——兩親に對する信用を弱くする。そしてまた、もし自分が性に關して誤つたことをしても、またこれに關して驚異を感じても——例へば女兒が初めて月經を見たときの如き——他人に隠すやうになり、誤つた行爲は益々助長され、驚異に對する適當なる處置は誤られてしまふ。隠すこと、や偽りをいふことは、少年の健全なる發達を妨げるものである。これを放任して顧みないのは、彼等に對する根本的罪惡であると主張するもの。

二、賣淫は人道上から見て許すべからざる罪惡であるが、その主なる理由は、花柳病による害毒を流すことの主たる原因であ

るからである。花柳病の恐るべき事實を少なからしめん爲には、賣笑婦制度の改善は固より然るべきことであるが、その根本は、人々が性慾生活に於ける正しき自覺と修養とを得て、性慾の濫費をなさないといふことにある。これが爲には、適當なる性教育を必要とするのである。

三、兒童の性的生活の現象は、いふまでもなく同一程度で繼續されるものではなく、年と共に明白となるのはいふまでもない。故に兒童の性的生活の現象は、誘惑によつて喚起することも出來れば、また發達を中止して退歩せしむることも出來る。これが性教育の可能なる理由でもあり、またその必要なる理由の一部分でもある。



四、多くの教育者は、従来の修身倫理で青年學生の所謂品性陶冶が充分に出来るかと考へてゐるが——實際我等はさうは考へてゐないが、この論者はさういつてゐる——多くの研究の結果によれば青年の性的生活の事實は、それ等の教育者の思惟してゐることを立派に裏切つてゐる。性慾の事實に鑑みないで、たゞ言葉の上のみ嚴格なる修身や倫理の講義は、誤つた性的生活に陥つてゐるものや、またはそれに走らうとする青年に對して、何の價値も權威もない。青年時代は、やゝもすれば性慾の爲に誤られやすい。故にこの時代に、性教育を施して、性的衛生を守らしむる必要がある。

五、少年の道德的純潔と結婚の純潔とは、古代に於てすでに神

聖とせられたる理想である。そしてこの理想は、性慾倫理教育によつて、その價値と威嚴とを確實に保ち得るものである。

六、青年時代は、男女共に自瀆的遂情を行ひやすい。そして、この結果としては、神經衰弱、ヒステリー、色情狂、或は子宮病等を始めとして、種々の生殖器病を招來することが多い。青年男女をして、これを自制せしむる方法は、一に性教育の實施にある。性教育は、單に自瀆的遂情を防止し得るのみでなく、彼等の性慾生活を健全ならしめ、道德的に個人的に心身を強健ならしめ、引いて、子孫の上に幸福を齎し得るのである。

七、同性愛、體部狂崇、庶物狂崇、殘忍性色情、被殘忍性色情、陰部露出症、獸姦、屍姦、偶像姦などの變態性慾的傾向を矯正し豫防する



上からいつて、性慾教育は是非施さねばならぬ。何となれば、變態性慾的感情は、何人も多少その萌芽を有するものであるから、少年時代に於て、十分これを矯正し、病的にまで發達せしめないやうに教育せねばならないからである。

八、人間の一生の中、一番危険な時期は、春機發動期である。そしてこの時期を最も安全に通過させ、道德的にまた生理的に結婚生活をするときまで、純潔を保たせてくれるものは、獨り性慾教育あるのみである。

九、性教育は、結婚の準備として必要である。また犯罪や家庭的悲劇の殆んど全部が、直接間接に性慾から發生するものであることを考へるとき、我等は、單に個人としてのみでなく、社會政

策乃至國家政策の上からも、性教育の必要缺くべからざることを痛感する。

一〇、道德を改良するところの重要にして且つ有望なる道は、性慾教育にある。

一一、女は先天的に羞恥心に富んでゐるし、また保守的のものである。従つて、何事につけても秘密的である。かくの如き秘密は、恰も謎のやうなもので、彼等は何人にも打ち開けることをせず、たゞ想像を以て了解しようとし、種々の煩悶を生ずるのである。これよりして多くの迷ひを起し、その結果は誘惑にかゝつたり、悪い行爲に觸れたりして、身を誤ることが多くある。故に女子自身が修養する上からも、周圍に於て、これを適當に導く



上からも、性教育は必要である。

一二、性的知識の獲得を、個人の體驗にまつべしと説くものもあるが、現代の社會に於ては、經濟上の關係から、次第に晩婚を餘儀なくされつゝある。その間、青年男女は多大の危険にさらされる。また適當の年齢に結婚し、順當な性的生活を營むものにして、個人の體驗のみにては、極めて局限された知識しか得られない。これ以外のすべてのことは、科學の力をかり、科學的に問題を解決して行くのに對して、性的知識のみを個人の體驗にまつべしとするは、迂愚の極である。況んや、性現象は複雑多岐極まりないものであるから、一人の體驗によつて、體得しつくすことは到底不可能である。また近時は、巷間に甚だ不完全なる

「衛生問答」の如き書物を多く見るやうになつたが、これが爲に、純潔なる青年をして、正當なる一性的現象を以て、病的現象なりと斷ぜしめ、非常なる煩悶を生ぜしむることがある。またかゝる場合に、醫師の門に走つた青年が、不幸にして、不正なる醫師の爲に嚇されて、神經衰弱になるとか、または取り返しのつかぬ破目に陥るとかいふことも少なくない。これと同じやうな弊害が、また賣藥廣告や、非科學的の生殖器説明書等によつても、惹き起される。これ等の危険を防ぎ、正當なる知識を授ける爲に、性教育は必要である。

まづ、以上記した十二の主張が、今日までに私の知り得たところのものである。これ等の主張を記すに就いては、文語體を口



語體になほし、前後の關係を明らかにする爲に、少しづゝの修正を施した外、一切原主張者の罵詈をそのまま用ひたのであるから、用語上の不統一は、止むを得ないことと考へるのである。さて、これ等の主張を概括して見ると、大體次の十一項になるだらうと思ふ。

一、性教育は結婚の準備として必要である。

二、犯罪家庭的悲劇は、直接間接に性慾から發生する。故に個人として必要であるばかりでなく、社會政策、國家政策の上から必要である。

三、花柳病の傳播防止の上から必要である。

四、春機發動期にある青年男女の墮落を防止する上から必要

である。

五、現代の性的生活は、新時代の強度の、そして惡傾向を帯びた影響を蒙つて、頗る危険に瀕してゐる。これを救済する爲に必要である。

六、従來の偏狹なる教育を匡正するのに必要である。

七、舊來の似而非道德を改善し、人類の道德的向上を促す上から必要である。

八、變態性慾的傾向を、矯正し豫防する上から必要である。

九、人間をして、自然的に且つ健全に、性的生活に入らしめる爲に必要である。

一〇、優生學の見地から特に必要である。



一一、一般に人間らしい人を作るのに必要のものである。次に私は、私自身が痛切に、適當の方法で性教育をしなければならぬと感じた二三の例を擧げて、参考に供したいと思ふ。前記のものと重複になるかも知れないが、私の實感といふ意味に於て、前記の諸主張を、更に具體化するのに役立つことゝ考へるから、敢て記すことにする。

その一つは、式場に於て、いつも感ずることである。我が東京高等師範學校に於ては、三大節には、小學校、中學校、本校の生徒児童全部が、大講堂に集つて式を擧げるのが例である。約二千人のものが一堂に會するのであるから、中々の混雜である。一番前が小學校児童、中央が中學生、一番後が本校生徒といふ順序に

整列する。そこで、いつでもきまつて騒々しいのは中學生殊に中學校と小學校との接觸點である。よく調べて見ると、この間で接觸するものは、小學校の上級の女生徒と、中學校の一年生とである。中學生は亂暴だといふことは、よく人のいふところであるが、この式の場合に於ける騒々しいのは、あながち亂暴な爲ばかりではなす。

どんなことを中學生がするかと思つて、見たり聞いたりしてゐると、女生徒が聞けば笑ひ出しさうなことを、聞えるやうに話し合ふ。そこで女生徒が笑ひ出す。中學生は得意になつてまた話す。それから甚だしくなると、女生徒に突き當るやうに一生徒を前に押しやる。といふやうな次第である。そこで次の



式の時には、この整列の仕方を變へて、大きな女生徒を中學生と離すやうにする。さうすると、その時は比較的靜肅に行く。私はこれを見る度に、一人で大いに考へさせられる。自分の幼なかつたときのことを考へて、成る程とうなづくこともある。

もう一つの例は、よく市街、殊に人通りの多い狭い街道、または込み合ふ電車などで見られることである。それは極めて小さな男兒——まづ十歳位の年齢のもの——が、好んで女の人に突き當ることである。相手が大人であつても娘であつても、それはかまはない。何でも女の人に突き當るのである。勿論誤つて當ることもあるが、多くの場合は、意識的にねらひを定めて、外見上は誤つたやうに見せかけつゝ、わざと突き當るのである。さう

欠



# 欠

## 實感の四

したのではなかつたかと思はれて可愛さうで仕方がない。私が性教育の必要を痛感したのは、實にこの時であつた。

最後に私は、不良少年や不良少女となつてしまつたものに就いての私の調査の結果から見て、性教育の必要な所以を述べようと思ふ。私は、數年前に千九百十五人の不良少年少女に就いて、出来るだけ詳かに研究して見た。そして彼等の不良行爲と性慾との間に、極めて緊密な關係の有することを發見した。まづ彼等の道樂に就いて調査した結果をいふと、男子は、第一が活動寫真、第二が芝居、第三が女道樂といふ順序になつてゐる。全體では二十二種ばかりの道樂の種類があるが、その中この三つは非常に高い歩合を示してゐる。女子に就いていふと、全體が



八種類ばかりある中で第一は男道樂、第二は活動寫眞、第三は芝居といふ順序になつてゐる。そして、男子と同様に、これ等の歩合は他のものに比して著しく高いのである。男子女子共に、この三つが共通であり、而も高い歩合を示してゐるといふのは、頗る注目に値することであるが、特に私の注意を惹いたのは、女子に於て、男道樂が第一位を占めてゐるといふことである。

然らば、かくの如き性的の道樂は何歳頃から始まつてゐるかといふに、男女共に、早く十二歳に於て見られるのである。「不良少年や不良少女は、この方面にかけては早熟である、通常のものにかくの如きことはない」といつて看過するのが、一般人の見解であるが、私は決してさうは考へない。勿論、不良少年少女の

調査からして、直ちに、一般善良のものを推定することは危険であり、多くの誤謬に陥ることを免れないとは考へてゐるが、やがて後になつて明らかにする如く、性本能の發動は、我等人類に於て、案外に早いといふことは、十分考へておかねばならぬ。

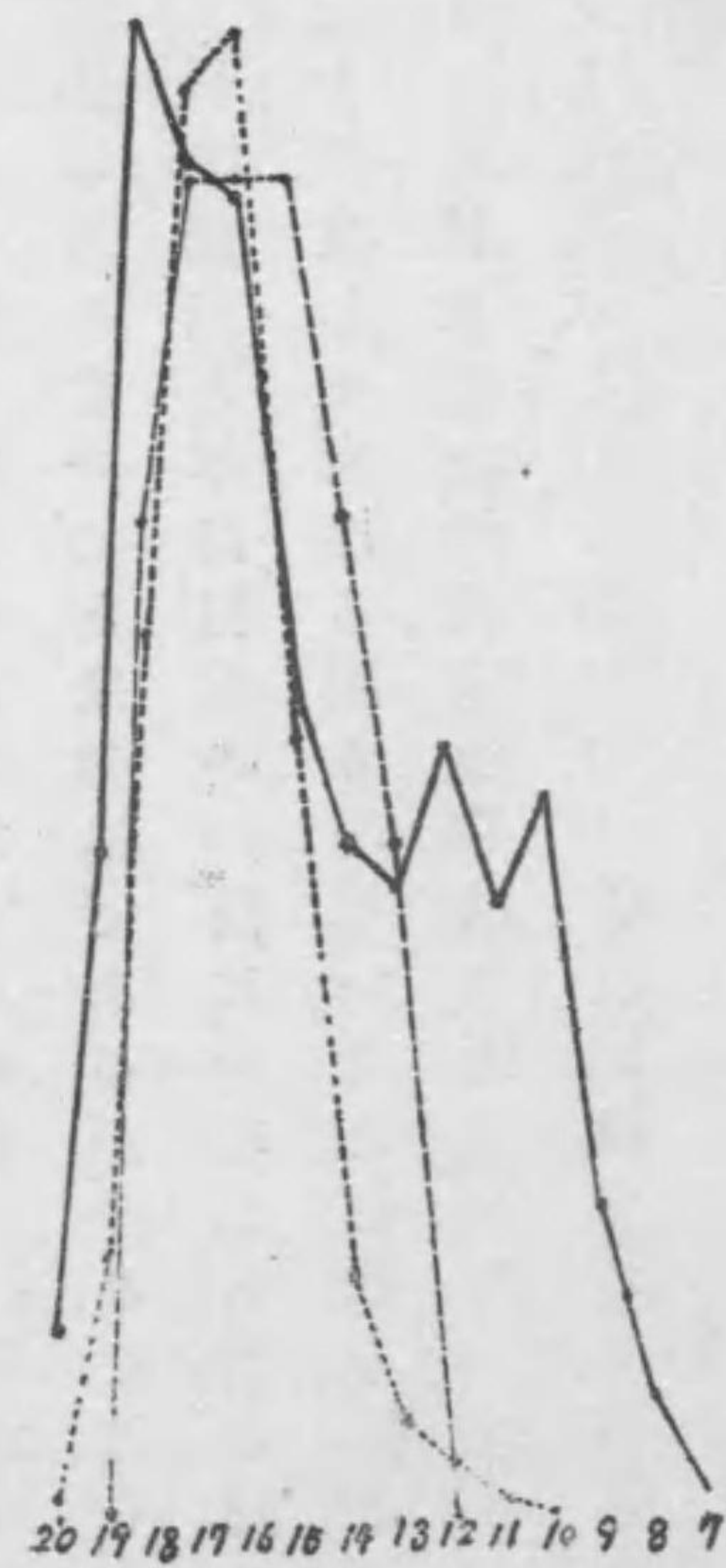
私は、多くの人々と共に、フロイドのいふが如くに、すべての我等の行爲を、性本能に歸着せしめ、或はこれを出發點として、説明することには反對するものであるが、とにかく彼のいふところに従へば、生後直ちから、この本能が働くといふことである。彼のみではない、多くのものが、具體的實例を擧げて、幼兒にすでにこの本能の働くことを主張してゐるのである。

従つても、もし幼年、少年、青年時代の環境や、一般教育上の方法な



どに於て純良でなかつたならば、恐らくは多くのものが、より善く發達すべき性能を、毀損するが如き結果に陥るであらうと考へるのである。次に、彼等がどの位の歩合に於て、色情關係をもつてゐるかといふに、男子は約二十四パーセント、女子は約三十パーセントに達してゐる。そして始めて異性に接した年齢は、男子は十一歳、女子は十三歳である。最も多いのは男子が十六歳十七歳で、女子は十五歳十六歳十七歳である。これに就いて特に注意すべきは、性的關係の増加と、不良行爲の増加とが、實によく平行してゐるといふことである。今、了解を便にする爲にこの兩者の關係を折線圖にして次に掲げよう。

□ 不良行爲と最初の性交との比較



右の圖の中黒線は、不良行爲の多少を示したものの、點線は、男子の最初の性交の割合を示したもので、切線は女子の最初の性交の割合を示したもので、下にある算用數字は、年齢を示したものである。例へば、十八歳のときが不良行爲の一番多いときであり、



男子にあつては十六歳が初めて性交するものが一番多いとき、女子に於ては、十五歳十六歳十七歳が最初に性交するものゝ最も多いときといふが如き意味に解すべきものである。この間の關係が本質的のものであるか、或は、他に本質的關係のものが存在するか否かといふことは、たゞ、これ等の研究からばかりでは、明らかにされないことは勿論であるが、少なくとも、この圖からして、性的關係と不良行爲との間に、少なからざる關係の存することを推定して、大なる誤りのないことを知り得るであらう。とにかく、道徳教育上、性教育の等閑に附すべからざることの一理由として、私はこれを擧げること躊躇するものではないのである。

### 第七 性教育の歴史及び現在

性教育の科學的研究が起つたのは、今日から約二十年以前であつて、その歴史は極めて新らしいのである。併し、その淵源するところは随分に古い。プラトーンがその教育論に於て男女共學を主張し、すべての生涯に於て、男女が協力して、その仕事をなすべきことを主張して終始變らなかつたのや、アリストートルが、またこれに關して注意を拂つたことなどは、人のよく知つてゐるところであらう。

これは、要するに、性慾の過敏になることを軟げる爲に外ならぬといはれてゐる。事實に於て、スバルタやチオス等に於ては、



一時婦女子が裸體のまゝで、男子と一緒に、若くは男子の面前で體育的競技を練習したり、またダンスの練習をしたりしたといふことである。野蠻時代であつたからだといへばそれまでであるが、幾分にせよ、性慾といふものを顧慮して、子弟の教育に當つたと見ることは、決して失當ではあるまい。

我等が、人類の道徳的發展の過程を調べて見るとき、どの種族にも、必ず子供から大人になる儀式といふものがあるのに氣が附くであらう。これは極めて嚴肅に行はれたもので、その種族にとつては、これ以上大切な儀式はないといつてもよい位に重んじられたものである。我が國に於ける元服といふのも、まづこれに相當するものと見られるであらう。現存する野蠻民族

の間には、發情期に於ける教導的儀式が、男女を通じて、嚴密に行はれてゐる。この儀式は、教戒と共に、身體的、精神的鍛鍊を包含してゐて、數週間若くは數ヶ月間續くといふことである。今、エリスの著述から、その一二の例を引用しよう。

「ピクトリアやオーストラリアの土人間の教導の儀式は、アル・エツチ・マシユウス氏によつて描かれてゐる如く、七ヶ月間續いて、一の感ずべき鍛鍊を形成してゐる。少年達は、種族中の年長者等に連れられて行つて、幾多の忍耐の試練や、苦痛不愉快等の我慢を課せられるのであるが、時としては、尿や排泄物を吞ませられたりさへする。異種族と接觸させられたり、法律や種族の教へを仕込まれたりして、最後に一つの會合が催されて、その



會合で、婚約者が定められるのである……」

「中央アフリカのアジンバランドに於ける少女の性的開始はエッチ・クラウフォード・アングス氏によつて、充分興味深く描かれてゐる。最初の月經の兆候があると、娘は、母親の手で用意してある草小屋へ、村から連れて行かれるのであるが、この草小屋へは、女だけが、娘を訪ねて行くことを許されてゐる。月經の終つた頃、娘は離れた場處に、また連れて行かれて、女等が彼等の周圍を踊りまはる。が、男は一人もその場にはやつて來ない。アングス氏は、その儀式を目撃する爲に、非常な困難を犯したさうである。それから娘は、性の衛生に關して教へられる。男と女との關係に就いての、多くの歌がうたはれて、少女は妻になつた

ときの一切の儀務を教へられる。……良人には忠實であるべきことと、子供を生むやうにしなければならぬことを教へられるのである。すべての事柄は、當然教へなければならぬ事柄と見做されて、一つとして恥づべきこと、隠すべきこととして、秘し隠されるやうなことはない。此の如く公然と取扱はれて、何の秘密も、性の事柄に就いては、隠しはしないのだが、この種族にあつては、女が非常に淑徳であることを發見するであらう。何故ならば、結婚生活の主題が、何か、かう眩いものでもあるかのやうに、彼女等の眼を、ごまかしはしないからである。女が妊娠したときには、彼女はまた舞踏される。今度は、すべての踊り手は裸體で、分娩の日が來たときには、どういふ風に振舞ふべきか、



何をすべきであるかを、彼女は教へられる。」

これ等によつて、野蠻人の性教育が目の前に見えるやうな氣がするではないか。私などは、三十歳を越した今日に至るまで、些かも、かやうな教育は受けてはゐないのである。恐らくは現在生きてゐられる我が國の人々の中で、適當な性教育を受けたといふ人は、餘り多くあるまいと思はれる。

併しながら我が國に於ても、やはり古代には、これに關する相當の教育があつたやうに思はれる。例へば、源氏物語の胡蝶の卷には、父親が、娘の侍女達に教訓することが出てゐるし、梅枝の卷には、父親が、女の子に教訓することが出てゐる。勿論、今日とても子供が放蕩などするときには、これを誡めることもあるが、そ

れとこれとはおのづから趣が違つてゐる。今、胡蝶の卷から、その一部を引用しよう。

「すべて女のものつゝみせず、心のまゝに、ものゝ哀もしりがほつくり、をかしきことをも見知らん、なん、そのつもりあぢきなかるべきを、宮、大將、何れも娘にいひよる男を指すは、おほなく、なをざりごとを、うち出で給ふべきにもあらず。また、あまりものほど知らぬやうならんも、御有様違へり。そのきはより下は、志のをもむきにしたがひて、あはれをもわき給へ、らうをもかぞへ給へなど聞えたまへば、君はうちをむきておはする……」

これだけではよくわかるまいが、これは、年頃の娘をもつた父親が、いひ寄る男の數多あるを知つて、その娘の侍女に、娘の前で



教へる言葉である。

かやうなわけで、古くには、随分具體的な突き込んだ教育もあつたやうであるが、一つには性慾の放肆といふやうな弊害もあり、また一つには、さきにも述べたやうに、キリスト教とか佛教とかいふ宗教の影響にもよつて、「肉」といふものを極端に蔑視した關係から、中頃に至つては、男女の裸體などは勿論のこと、性の問題に觸れることを穢れとして嚴重に排斥し、所謂禁慾生活なども行はれるやうになつたのである。併し人間の根強い本能、最も大切な本能の一つである性慾は、堰かうとすればするほど、氾濫せねばやまぬ状態を呈して、極端な墮落時代も出來て來たわけである。

性教育の主張さるゝ前提をなすのは、近世に於ける性慾研究の解放である。即ち、誤りたる宗教的偏見を破つて、性慾の科學的研究の起つたことである。併し、それ以前にも、例へば、ルソーはエミールに於て、サードはその小説に於て、またスウイスの醫師テイソーは、一七五八年、その著「手淫より生ずる病氣の取扱ひ」に於て、共に性教育の必要を唱へ、これに賛するものも少なくなかつたが、當時の大勢は、性に關することは、人生の秘事に屬するといふ理由の下に、反對したのであつた。

然るに、一八五九年に、ダーウインが「種の起源」を出し、生物進化の法則を創説するに及んで、他のすべての科學と共に、性慾研究も、また純然たる科學的色彩を帯ぶるやうになり、こゝに一



大進歩を遂げたのである。併し、一八九〇年に、ハルレに開かれた道徳會議に於ては、未だ性教育の實行に對しては、賛成するものが多くなつたのである。なほ、當時の形勢を知るに足る一例としては、一八九九年に、ロンドンが「自瀆遂情論」を出して、少青年男女の自瀆的行爲を制せしめんとしたときに、當時の教育家の多數から、非常なる攻撃を受けたといふことを擧げることが出來ようと思ふ。

然るに近頃に至つては、一般社會も、やうやくその必要を認むるに至り、エリス、フロイド、スタンリー・ホール、ピゲロイ等の有名なる研究家を出すやうになり、これに關する研究論文や著書なども、頗る多數に上るやうになつて來たのである。次に、今日の

現狀

實際の狀況を簡単に記すことにしよう。

エリスは、ドイツが最も盛んであると述べてゐる。私も、さきに世界大戰後のドイツの教育改造運動を述べた際に、その盛んなことを一言しておいたが、英米を始めとして、フランスやスカンヂナビヤの諸國などに於ても、これに劣らず盛んなやうである。小西重道博士は、大正十年六月十日及び十一日の東京朝日新聞に於て、次のやうに述べてゐる。

「之を學校教育の實際に就て見るのに、カナダのオンタリオに於ては、其州立の學校に於て、十歳以上の男女の生徒に、生理教授の際に、性本能に關する教授を施し、北米合衆國に於ても、モアロイなどが中心となりて出來上つた衛生及び道徳上の豫防に關



する協會や、シカゴの社會衛生協會、其他紐育、ホルチモニア、フィラデルフィヤ、インデアナ、セントルイス外十餘箇所にて、既に夫々協會を組織して、性本能の教育を普及させようとして居る様子である。これは十年許り以前にホルルの調べたものに依るのであるから、今日では更に一層増加して居るであらうと思ふ。

ホルルの所説では、獨逸に於ても先年來此方面に關する教育運動が盛になり、研究的宣傳の協會も組織され、千九百〇七年にマンハイムに開かれた第三回目の大會には、プロイセン及バエルの文部大臣迄も出席し、プロイセンの文部省は、また特に實際家の意見をも徴し、ライプチヒ、其他二三の都市に於ては已に

中等學校及小學校の上級に於て、性の教育を試みて居るといふことである。プロイセンでは、軍隊の士官にも此種の講話を聞かせ、士官をして更に兵士に講話せしめたことも度々であつて、士官自らは、兵士に對する面目上自然に身を慎み、兵士の放恣の態度も稍改まつたといふことである。尤も大戰當時の様子などに徴すれば、其教育上の効果が果して有りしや否やは、頗る疑問とせざるを得ない。

其他佛國に於ても、醫士ピナール氏などが熱心に此方面の教育に運動し、英國や伊太利、瑞西諸國に於ても漸次注意され、又試みに實施されつゝある状態と聞いて居る。斯くて現代に於ては、殆ど何れの主なる國に於ても、教育上の緊要問題として漸次學



校の訓練や教授の課程乃至課外講話の中に、多少の地位を占めんとして居る形勢と見て誤りがなからうと思ふのである」と。  
更に、一九二三年五月二十六日のアメリカ醫學會雜誌には英國の性教育の現状に就いて左の如き記事を載せてゐる。

「英國々民公衆道德總會議によりて選任せられたる國民出生率調査委員會は、最近性教育に就て、重要な報告を文部大臣に宛て差出し、性教育に對して從來よりも更に深き考慮をなすべきことを希望した。(同調査委員會の報告は、從來人口問題、産兒制限問題、性教育問題、花柳病問題等を研究するものに重要視せられて居る) 其内容梗概は左の如くである。

**第一、性教育は至難であるが、青年の道德的安全幸福を完うせ**

しむる爲めには等閑に附すことが出来ない。

**第二、性教育は春機發動期に近付いたとき、始めてこれを開始すべきであるといふ在來の方針は不可である。**子供が「私はどこから生れたのでせう」と自己の起因を問うた場合には、子供が充分理解するやうに教へる必要がある。勿論男女の關係に就いては述ぶべきでないが、昔噺などで胡麻化してはならぬ。子供をして問ふべからざる疑問を發したかの如き感を懐かしめてはよろしくない。「詳しいことは後で大きくなるとよく解るやうになります」といふてもよろしいが、子供の好奇心だけは満足させてやらねばならない。

**第三、性教育開始の年齢に就いては、子供の發育環境によつて**



性に對する好奇心を起す年齢が一定しないから、一概に幾歳と定むることは出来ない。不要の性教育をなして性に就いての好奇心(知識慾)の發現を早からしむるが如きは不可であるが、もしこの知識慾が一度現はれた場合は、眞面目に満足せしめねばならぬ。性に關する知識は、漸々與ふべきもので、春機發動期に急に教へて驚かしむべきではない。春機發動期に達したる曉には、子供に教へるよりも、更に詳細適確に教へる必要を生ずるが、もし豫備教育を與へなかつたものに對して、突然これをなすときは、却つて有害なる結果を來すことがある。故に何時にても子供が、性問題に對して疑問を發したならば、或は性慾的惡癖が發芽すると知つたならば、性教育は開始せられねばならぬ。

第四、性教育の内容に就いては、今後の研究を要すべく、諸委員の意見が全く一致しなかつた。性に對する知識のある範圍は教ふべからざること及び母性に就いて先づ教へるのが適當であることに意見が一致した。

第五、性教育はなるべく概括的、客觀的なるべく、情熱的感興を誘發せぬやうにとめること、熱心を要するが情熱的でないこと。生物の生活、出生、成長等に就いて述ぶる豫備的教育は、理科の課目として教室にて教ふべきも、春機發動期に必要な性教育は、教室に於て施すべきものにあらずして、特別教育となすべきこと、而して更に個人教育の要もある。

第六、性教育は誰がなすべきかに就いては、先づ兩親を第一と



する、但し兩親にてもこの教育に適せざる人がある、或はその責任を感じざる人がある、或はそんなデリケートなことをいふのをいやがる人もある、その時は學校教師がその任に當らねばならない。教師はこの教育に就いては、父兄の同意を得、なるべく共同してこれを行ひ、そして性教育を實施し得るだけの修養を必要とする。」(雜誌「文化生活」第三卷八月號による)

以て英國に於ける現況を知ることが出来るであらう。我が國に於ても、こゝ二三年來教育者の間に、眞面目な態度で研究され始めたけれども、まだく、歐米諸國に比すれば幼稚であるといはねばならぬ。大體からいふと、まだ「性教育の可否如何」といふことを論じてゐる程度であるといつてよろしい。そし

て反對論者の主張の要點は、「觸らぬ神に祟なし」といふところにあるやうである。また、性教育の實施に賛成するものゝ中にも、「小學校では斷じて施す要はない。中等教育以上では、——もし必要ありとすれば——極めて廣い意味の性教育は實施してもよろしい」といふことを論ずる人もある。併しながら、最も積極的態度をとつて、性教育の實施の必要を主張するものもないではない。こゝに、その代表として、大正十一年四月に行はれた女子教育大會の性教育に對する決議を引くことにする。

□性教育の適當なる方法

一、性教育の内容は左の八項とす。

△性の個人衛生 △性の社會衛生 △賣笑婦問題 △私生兒問題



に必要な知識を授くるも、將又兩者を併用するも可なるべし。

□性教育の方案

性教育は生命創造の驚異に發端す、之を善導するは母の任務なり（生命の尊貴、母性の愛重、民族擁護の念蓋しこれより萌さん）少年期に於ける性教育は、異性に對する禮儀作法の双務的なるを教へ、性に關する事項を問題とし、或は笑話とすべからざること、を説き、他方に於ては、衛生の眞義の全人的なるべき旨を注意するにあり。

青年期に於ける性教育は、男女道德の双務的たる所以を知りて、各自純潔に其の心身を保持し、結婚の目的は、現在に於ける

△性の道德 △性の神聖 △結婚の問題 △人種の改善問題  
一、性慾教育若くは性衛生を單獨に取扱ひて、前後の連絡を缺くは、其の目的を達せざるのみならず、却つて種々の弊害を惹起するの恐れあるを以て、之を廣く性教育の一部として取扱ふべきものとす。

一、從つて本問題を、青年前期に限るものとなすは適用をあやまる所以なれば、幼兒兒童期にありても、將た青年後期にありても、等しく注意を加ふべきものとす、但其内容の異なるは勿論なり。

一、之を説くの方法は、諸學科に於て性に關する事項ある毎に教授するも、或は又適當の機會に於て、性を中心として其の時期



人格の修養、次世に於ける民族の改善にある確信を生ぜしめ、之が爲に道徳的訓練を興へ、科學的知識を授くるにあり。まづこれによつて、我が國の現状を推定し得るであらう。固より國情、風習、自然環境その他一切の事情を異にしてゐる我が國に於て、直ちに外國で行つてゐる通りに實行し得ないことはいふまでもないが、併し同じく人間であるといふ點から考へて見ると、その具體的方法や程度には、幾分の相違はあつたにしても、「我が國に於ても、また行つて行かねばならぬ」といふことだけは認めなければなるまい。この點だけから考へても、我が國の教育が、まだ／＼遅れてゐるといふことを否定するわけには行かないのである。

### 第八 性教育の方法に就いて

次に私は、性教育の方法に就いて述べる。これは、性教育の實施に關して、最も緊切なる問題であるから、出来るだけ詳かに論じて行く考へではあるが、固より完全な説明はとも出来ない。まづ、その大略が理解出来たらよいと思はねばならぬ。何となれば、これは問題の性質上、具體的になればなるほど個別的になつて行つて、到底一般的の原則を定めること、及びあらゆる場合をつくすことは出来ないものであるから。

さて、これに關して考ふべきことは、澤山あるけれども、大別して二方面とすることが出来るであらう。一は、一般的議論の檢



索と、二は具體的方法に關する主張の研究とである。そして、その具體的方法に關するものにも二つある。一つは、直接的方法であり、他は間接的方法である。その直接的方法の中、特に重要な問題は、まづ何歳より始めて、大體何歳頃に終るべきものであるかといふこと、何を教ふべきであるかといふこと、誰が教ふべきであるかといふこと、如何にして教へるがよいかといふことの四つ位にならうと思ふ。間接的方法に就いても、同様のことがいひ得るだらうけれども、直接的方法に於けるほど、詳細に分析的に考へる必要はあるまいと考へる。

私は以上の計畫に従つて、まづ第一に、性教育の方法に就いて

の一般的議論の検索から進んで行くことにする。勿論これも、その大體に亘つてのことである。

これに關して、タルミは次のやうに述べてゐる。我等は、子供に對しては、適當に性教育を施さねばならないが、併し、露骨に現實をそのまま教へねばならぬといふわけではない。子供にはなほ理解し得ざる多くの方面があるから、徐々に、その理解の程度に應じて教へて行き、遂には完全に授け終はるべきである。それに就いて、良い方法と思はれるのは、レッシングのとつたやり方である。彼はいふ「子供には全く眞實なる知識を授けねばならぬ。教へるには、眞實より外に何物もない。たとひ不適當であり、また理解し得ないからといつて、決して嘘をいつたり、



遠まはしにいつたりすべきではない。併し何れの年齢をも問はずに、一度にその知識全部を授けよといふのではない。それには、おのづから時期と程度と方法を考慮せねばならぬ。さうしても、もし子供が疑問を起し、質問を始めたならば、そのときは教へるに最も適當な時機である。程度に應じて十分了解せしめ、かくして健全な道德の發達を害さない様にすべきである」と。併し現代の社會状態に於ては、この教育法を遷延して、徐ろに青少年が如何にしてその知的能力と道德的素質とを頽廢せしめてゐるかを研究してゐる餘裕をもたない。何となれば、魔の手は、すでに盛んに働きつゝあるからである……と。

また他の一説には、西洋の或る人の言によると、男兒に對して

は父親が、女兒に對しては母親が、性に就いて教ふべきであるとのことであるが、さてお互に父となり母となつても、如何やうに話し、如何やうに説明すべきか、大に惑はざるを得ないことに誰しも氣がつかるゝことであらうと思ふ。そこで……一冊の書物にまとめて、子女が年頃になつたときに、その父なり母なりの手から、極めて嚴肅の態度で、さてお前も年頃になつたに就いては、この書物を熟讀し、年頃相當の生理を知り、衛生を守り、心と體との健全を計らねばならぬ。この書物の中には、人生の一大事が説いてあるぞと、懇切にいひ含めて與へたならば、色々の點で便利であり、且つ實際的效果が伴ひはしまいか。などゝいつてゐるものもある。



エリスは、「母はその小兒に對して、彼女の肉體的關係の純潔と尊嚴とに就き、最も絶對的な信仰をもち、正直と優しい態度で話すことが根本的に大切である……小兒が質問を出すや否や、嬰兒の母に對する關係を、母親が小兒に説明することは、根本的に賛成すべきである」といひ、更にモルの意見を引用して「性的教化は秘密の個人的のことに屬さねばならない。學校にあつては、一般的でなく、個人的に手淫を誡しめねばならぬ……母親は小兒に親密な知識を傳へるに適當した人であつて……年齢に適當する形式で、説くやうに用意しておく人でなければならぬ」といつてゐる。そしてこれに次いで「性的教育は技巧的であつてはならないし、また技巧的であることは出來ない。それは

形式的な教訓の性質のものではなくして、私的な親しい教導である。勿論母自身も教へられなければならない。併し彼女が必要とする教育は、主に愛と洞察とによる教育である」と述べてゐる。

またルソーは「兒童の疑問には、忠實に答へてやるべきであつて、性的關係の如き、しかく嚴肅にして神聖なる事實は、斷じて戲談にして教へてはならない」といひ、マリア・リスシュエヌスカ女史は「今日の家庭生活や家庭外の生活には、性的問題との粗野な親密を結ぶ種々の機會はあるが、彼等に純潔な啓發的な紹介を與へる機會はなく、両親は大部分、道德的にも知識的にも、彼等の純潔を助けてやり得る資格を缺いてゐる」といつてゐる。



る。

我が國の小西重道氏は「一般に教育の能率の大部分は教師その人の如何に關係するのであるが、性本能の教育のやうな、デリケートの性質のものには、教育者その人を殊に選ぶ必要があるであらうと思ふ……教育者は教育者としての資格に對して、此點に關する相當の修養を積み、時宜に應じて、生徒を指導するとは必要なるべきも、一定の時間の下に、一定の教授を施し得るものとしては、餘程教師を選ばねばなるまい。現在に於ては、多くの場合に於て、醫師の援助を仰ぐことが、最も無難で而も効果が多いではあるまいかと思はれる。而も女子の生徒に對しては、女醫がよろしいといふ意見も出てゐるのである。その他

中等學校などにては、修身や博物の先生達が、指導上適當な地位にゐるものであらう。然らば、如何なる程度まで深入りすべきであるかといふことは、生徒の年齢によつても異ならざるを得ざるべく、また一般に全生徒に對する場合と、個人的に指導する場合とにより、相當考慮すべきであらうが、特殊な個人的指導の場合には、餘程深入りするも差支ないといふことは一般に考へられることであらう」といつてゐる。

井上哲次郎氏は「女子は女教師、男子は男教師が指導するがよい。餘り深入りをせず、男女關係等を社會的に説明し、間接に幾らかの理解をさせる程度で止めたならば、甚だしい弊害がなく、て濟むであらうと思ふ。多少でも危険があるやうであるな



らば、むしろ觸れない方がよい。そして、慎重な著書の購讀によつて、性慾問題の概觀を理解せしむるやうにするがよい」といふ様な意見を發表してゐる。

その他、一般的議論としては、或は「家庭は小兒の身體的及び精神的健康の基礎を與へるところである。故に性慾教育並にその手段に就いて、事實的及び法式的に教授するは、兩親の義務である」といひ、また「全教育の問題と、性慾教育上の要求とを適切に結びつくるときは、學校は大に性慾道德上の健康を促進し得べく……全體の教師に學校衛生及び性的衛生の知識を與へるのは、學校の効果を増さしめる……各級毎に適切なる解説的敎訓を與へるのが有效である……生殖及び種の保續に關する多少

の知識は、すでに中頃の級に於て……必要であり、卒業生に對するこれに關する講演は……悔るべからざる價値を有するものである。併しこれは卒業試験成績の發表後になすがよい」とも主張し、或はまた「二十歳までの少年は、十四歳乃至十六歳の春機發動期に於ける性慾教育、特に學校に於ける性慾教育によつて、十分にその方向を轉ぜしむることに努力すれば、あらゆる性的活動より遠ざからしめることが出来る。成長せるもの、即ち性的に熟せる人々は、少年よりも他の方法に於て、誘導しなければならぬ。この際本來の教育學、即ち嚴格な意味に於ける教育學は、全然何の用をもなさないものである。要するに、性慾教育は春機發動期より遙かに以前、即ち尋常小學校時代より、極めて自



然に、何等兒童に新奇の思ひを抱かしむることなく、尋常茶飯事として、彼等が「いろはにほへと」を學ぶ如く、施して行くことが出来る。またさうして施して行かねばならないのである。など、いつて、少しく極端な議論をする人もあるのである。例によつて、用語は、本の使用のまゝに従つてゐることを記しておく。

以上によつて、性教育の方法に關する一般的説明の大體は、これを知り得らるゝことと思ふが、これ等の諸説は、大體に於て、同じ方向に傾いてゐるといつてよからう。これ等の中の、何れが最も肯綮に値するものであるかといふことは、俄かに斷定することは出来ないが、とにかく、餘り消極的態度をとるべきではな

いと私は考へるのである。今、その取捨選擇は、これを人々の欲するところに一任するとして、私は、我が國の情態や從來の風習などに鑑みて、これ等の上に、更に次の事項を附記しておきたいと思ふのである。

一、外國でやつてゐるからといつて、また外國人がいふからといつて、俄かに我が國が、その眞似をして、同じことをするのは大きな失敗の本になるから、出来るだけ態度を慎重にせねばならないといふこと。

二、我が國では、從來この問題に關しては、なるべく觸れないやうに努めて來てゐる。考へやうによつては、甚だ誤つた考へであるやうにも思はれようが、また他方には、さうすることに、それ



相當の理由もあつたのである。だから、今、この方面を新たに開拓して、教育的効果を更に大ならしめようとする試みをする場合に於ても、従來のやり方を十分に顧慮せねばならぬ。外國では急激な變化でないことでも、我が國にとつては著しい大變化であることもある。またこの反對のこともいひ得らるゝであらう。改造といふことも、一歩々々と進まねばならぬ筈のものであるから、性教育の問題に就いても、また是非漸進主義によらねばならないといふこと。

三、また、今、生れたばかりのもの、或は三四歳位になつてゐる小兒と、學齡以上になつてゐる少年との間には、取扱ひ上大なる差別をつけねばならぬといふこと。何となれば、今日すでに學齡

以上になつてゐる少年或は青年は、まづ殆んど性に關する具體的教育は受けて居らないといつてもよいのである。かやうな人々に、突然——如何に外國では年齢相當であるといはれることであつても——これに關する教育を施すことは、彼等をして、必ず新奇の感を抱かしめ、或は嚴肅なる態度を失はしめるやうな結果になるだらうと思ふ。

もしかやうになつたとすれば、すでに、それだけで性教育の效果の大半を失ふことになり、それに伴ふ弊害の方が却つて大きくなるだらうと思ふ。故に、彼等に對しては、消極的態度をとり、後に述ぶるが如き、間接的方法に、主力を注ぐべきであらうと思ふ。これに反して、生後間もないもの、更に廣くいへば、今日まだ



學齡以前にあるやうな小兒に對しては、むしろ積極的方法に訴へ、十分に基本的教育を施し、學齡以後に於ても、これを基礎として、出来るだけ進んで教育すべきであると考へるからである。

四、更に、これに關連してゐることではあるが、今日に於ては、成人教育が必要であるといふこと。これは、今日の成人——例へば父母にしても學校教師にしても、なほ廣くいへば、社會一般の成人——は、性教育に就いて、全然とはいへないまでも、まづ大體に於て無知である。故にこれ等の人に對して、相當の一般的理解と更に進んでは、なるべく精密な性教育に關する知識や信念を與へる必要があるからである。

次に具體的方法に進んで述べよう。まづ第一が直接教育の方面である。こゝに直接教育の方面といふのは、主として性に關する知識を授ける方面を指していつてゐるのである。

◆年齢の問題 性教育を主として、何時頃から始めるかといふ問題である。何時頃に終るべきかといふことは主たる問題ではない。

一、中學校の三四年生、高等女學校の二三年生徒の年齢になつたものに教へるがよいとの主張。この主張とても、それ以前は、全然不必要であるといふのではないが、主として、この位の年齢になつて行ふがよいとの考へである。そして、これは中々多くの人の考へてゐるところである。



二、明らかに何歳とはいはないが、小學校兒童位の年頃のものは断じて行ふ必要はない。もし必要があるとするならば、中等學校の上級になつて行ふがよいといふ主張。これは先きに引用した井上哲次郎氏などが唱へるところである。第一の主張と、大體に於て、同じものと見てよろしからう。

三、小西重道氏は、次のやうに主張してゐる。……最後に一言したきは、性教育の時期である。フロイド説の様に、性本能といふものは種々の要素と關係があるとすれば、乳兒が母の乳を吸ふ所の吸ひ方までにも注意を加へねばならないことになる。否、嚴密に遡つて考ふれば、遺傳の問題にも想到すべきであつて、家庭

に於ける子供の性教育は、先づ父母自身がこれに當らねばならぬことになる。又性本能を刺戟する外物に對しては、幼兒時代より早く已に注意さるべきものであつて、食物、衣服、寢具等にも少からざる考慮を要する譯であらう。

幼兒の好奇心的な知識慾の問題として、例へば子供は何處より生れたかなどといふ、幼兒の無邪氣なる問に對しては、何れの國の家庭に於ても、皆均しく苦しむ點であつて、西洋では或は神様から頂戴したとか、鶴が持つて來て呉れたなど、話して居るのが普通であらうが、性の教育の主唱者は、斯様な答には満足せず、理智的に眞實に近い知識を與ふべしとなし、ガリシヤン氏などは其著「兩親及教師用性教育教科書」に於て、植物動物な



どの例より人間に説き及ぼし、幼児にも理解し易き適切な話し方を紹介して居る。

斯様に性的教育の一部は、少くも已に幼児の時期より試むべしといふことが、性教育主唱者の聲であり、小學時代に於いても自然科の教授等に於て、先づ試むるのが順序であらうといふことになつて居るが、性本能其ものに關する具體的な適切な指導は、多くは中等學校の上級位の程度に於いて試みられて居る様である。

四、これ等に反して、タルミールなどは、「性教育は幼児が生れ出た時から、すでに始めなければならぬ。勿論この時期に於ける教育は、他の幼児期に於けるものよりも、遙かに性質を異にせる

ものであることはいふまでもないが、一般にその教育は消極的な性質を有するものであるといふことが出来る……」と主張してゐる。フロイドなど、同様な考へ方であるといつてよろしからう。

五、小學校に入學する頃から、中等學校卒業頃まで行ふがよい。即ち中等學校以下の學校教育を行ふ間、他の教科と連絡しつつ、教へるがよいと主張してゐると見得る説。これも中々有力な考へである。

六、春機發動は、十四歳乃至十六歳に起るものであつて、性的活動が顯著に外部に現はれるのはこの時期である。併し、十三歳もしくは十二歳にして、早く春機發動期に達するものも決して



稀ではない。殊に大都市に於て、その例が少なくない。性的活動の外的表現が、かくの如く早いことは、やがて性慾教育を少年時代に開始すべき理由を示すものであるといつて、やゝ漠然としてゐるが、春機發動期より以前、まづ小學校時代から性教育を開始すべしと主張するものである。これは、大體第五の主張と同様であるが、この方が第五よりやゝ後に始むべしと主張するものである。即ちこれは、春機發動期を中心として考へ、これより以前といふのであるから、小學校入學の時より始めよといふほど、早くはないと推定し得らるゝのである。

七、エリスは次のやうに主張してゐる。……小兒が自身の出所に關しての知識を求め、慾求は……全く自然で、卒直で、害のない

慾求である。四歳の小兒は、このことに就いて、單純に自發的に質問を發することがある。この問題が起り、遂にいはれるやうになるや否や、小兒の知識範圍及びその能力と知識に對する慾求の程度とに従つて、答へられねばならぬ。もしこれ等の徵向が他の何物かによつて惹き起され、または、ある場合には、それが不自然であつたにしても、この時期は、六歳以上までは遅れないであらう。最も注意深く用心してすら、六歳以後は他からの通告で、氣持がけがされ勝ちである。ヒル氏は「種々の状態にあつて、女兒の性的教化は、男兒よりも常に少しは進んでゐる……。」と指摘してゐると。

以上、諸説を擧げたのであるが、この性教育を開始すべき年齢



に就いては、大いに説を異にしてゐるものゝあることに氣附いたことと思ふ。併しこゝに注意すべきは、かくの如くに、その時期に相違あることの原因は、いはゆる性教育の意義が、區々として一定してゐないといふことにあるといふことである。或はまたかうも考へられる。即ち甲の論者と乙の論者とに於て、性教育そのものゝ意味は、大體に於て同様であるとしても、その主たる材料を如何なるものにおくかといふことが、人によつて異なるが爲に、或るものは、中等學校の上級に於て實施せよといひ、他のものは、小學校入學當初、或はそれ以前に教へよと論ずるのではないかと。

かやうなわけであるから、年齢のみを切り離して考へること

は、實は餘りよい調べ方ではない。どうしても、教へる人と、教へる材料と、教へられるものと、教へ方とは堅く結び附いてゐるもので、實際に於ては引き離し得ざる性質のものである。私もこれはよく承知してゐるが、とにかく一應の理解をする便宜からいへば、假りにこれを分離せしめて述べた方がよいと考へて、わざとかういふ述べ方をするのである。故に一應の了解が出来た後には、是非共、これ等を一つに組み合せて、更に進んで自らの工夫をすることが必要であらう。

◆教材の問題　これは、先きに「性教育の意義」のところまで調査したことゝ、結局は同じであるが、これとそれとの相違は、主にこれが、何歳頃にはどんなことに就いて教へ、更に年齢が進ん



だときは、何に移つて教ふべきであるかといふ點を明らかにするところにある。

一、これに關して、極めて簡單でわかり易く、而も系統的に説いてゐるのは、タルミーであらう。今、その大略を述べる。

(二) 幼児及び幼年期 出生から四歳までの間は、心理上、性の知識を全くもたない時代である。この時代の教育は非常に重要である。この時期に於ては、自瀆の習慣より外に、性的器官を使ふことはない。子供は他の悪い指導者によらなくても、自然的な興味から、これを試みて見たくなり、遂に外局部を摩擦することになる。偶然にも、子供が、この器官を、何といふこともなく弄ぶと、或る快感が續いて起るといふことを経験すると、何回もこ

れを繰り返すやうになり、やがて習慣となつてしまふ。この習慣は、不注意な母親や召し使などによつてつけられる。中には子供の局部を摩擦して、喜ばせたりあやしたりなどするものがあるが、とんでもない誤りである。また子供を喜ばせる爲に、彼等のお尻を軽くたゝいてやるものもある。臀部の刺戟は、直ちに局部に影響して、情慾を挑發する。更に甚だしいのは、召し使などが、自分の慾情を満足させる爲に、わざと好んで小兒の局部を弄ぶことがある。

ロソン・テート氏は、どんなことがあつても、子供を召し使と一緒に寝させてはいけないといつてゐる。更に手淫の習慣を起す他の原因は、局部を不潔にしておくことである。不潔の爲



に起る刺戟を除く爲に、子供は、つい手で搔く。この時に快感が起つて、遂に屢々搔いて、習慣となつてしまふことがある。女兒にあつては、往々股をもぢ合せることから、局部を摩擦して手淫をするやうになることがある。故によくこれ等の點に注意せねばならぬ。

親達は、また子供の性的器官の健康と發達とに注意し、幾分いせよ異狀の點があるときは、直ちに醫師の診察を受けねばならぬ。子供が十分理解する位になつたなら、必要もないのに局部を弄ぶのは、鼻の孔や口や眼などを弄ぶのと、同じやうに悪いといふことを堅く誡めねばならぬ。また、この時代に、自然物や藝術上の作品などで、子供に裸體をよく見慣れさせておく必要が

ある。さうすると大きくなつて、裸體の前に立つたとき、性慾の感情を起さずに済むのである。

(二)四歳乃至七歳の子供、羞恥の感は、子供が四歳になる頃から起る。「人間は一體どうして生れるのか」といふことに關する好奇心の起るのは、丁度この頃である。積極的教育の第一歩は、この時に始めねばならぬ。この頃の子供にとつては、人が生れることは、草や木が蕾をもつと同じやうに考へられて、神聖なものと思つてゐる。だから、これを説明してやつたところで、少しも恥づかしいといふ感じは起さない。だから、家に赤ん坊が生れたときでも、お隣の赤ちゃんがおぎあといつたときでも、何の思案もなく、「赤ん坊はどこから生れたの」といつて、母親



の側へ寄つて行く。この時にごまかしたり、または「子供の出る幕ぢやない」などいつて追つ拂つたりなどしてはいけな  
い。もし純潔の子供が變てこな返事をされたとするとすぐに  
「これは變だわい」と感附いてしまふ。そして、それから後は「俺にはわからない、内の人は何にも教へてくれない」と思つても  
う何にも聞かなくなる。

さうして、友達などから猥らな形で、自分の疑問を解いてもらふ。さうなると「俺の誕生も罪惡の報いだな」と考へるやうになる。「一體親達はなぜ俺に本當のことを教へてくれなかつたのか」と考へる。こゝで、親に對する信用がぐらつき出し、尊敬の念が薄らぐ。故に質問があつたら、本當のことを教へるが

例話

よい。併し我等は、子供が是非知りたいたと思ふこと以外に亘つて教へる必要はない。教訓は子供の好奇心を満足せしむればそれで十分である。例へば、子供が生れるに就いての父親の役割を説明するなどは不必要である。そこで、母親は次のやうに教へるがよい。

「丁度小鳥が卵から生れたり、お花が蕾から咲くやうに、赤ちやんもまた「お卵」から生れるのですよ。このお卵は、それはそれは小さいの。だから、いくら大きな眼を開いても見えません。その上随分かよわいものですから、一寸さわつても、すぐこはれてしまひます。ですからこのお卵は、外におくことは出来ないのです。どの子供だつて、みんなお卵として、お母



さんのお腹の中に宿されるのは、かういふわけからです。雞だつてお魚だつて、やつぱり同じですよ。女の體の中には、丁度子供の宿つてゐるやうな場處があるので、少しも傷をうけることなしに、お母さんのお蔭に、おいしいものを食べて大きくなるのです。お母さんが息をすると、赤ん坊も息をするし、お母さんが御飯をいたゞくと、子供もやつぱりいたゞくのです。赤ん坊は、お母さんのいたゞくものを、少しづつ分けていただくのですよ。かうして安全に温かに、お母さんのお腹の中で、立派に育つて行くのです。十分大きくなつて、もう大丈夫の中へ出ても心配はないといふ頃になると、赤ん坊の體を入れておく場處が狭くなるので、自然とお腹が開いて、そし

て赤ん坊が生れるのです。これが「お誕生」といふことなの。併しね、その時には、お母さんは随分苦しむのです。場合によれば、赤ん坊の生れる爲に、お母さんの命をおとすこともある位に。」

そしてまた子供が、「お母さん、私もやつぱりお母さんのお腹の中に宿つて居つたのですか」と尋ねたならば、その時には、かう答へるがよい。

「本當ですよお前——私はお前を九ヶ月の間も、このお腹の中に抱いてゐたのです。そして私の體の中にある養分で育て、あげたのです。誰よりも一番さきに、私はお前を知つてゐたのです。そのわけは、九ヶ月といふ長い間、二人で一緒に生き



てゐて、このお腹の奥の方に、大事に／＼にしまつておいてあげたからなのです。だからお前は、私の肉なんです。血なんです。いえ／＼お前は、実は私の一部分なのです。だから二人は、お互に、こんなに大變愛し合ふのです」と。

以上のやうに、出生の由來を話して聞かせた後、またかう教へねばならぬ。

「このことに就いては、無暗に、外の人と話し合つてはなりません。殊に學校でお友達など、話し合ふのは大禁物です。といふのは、お誕生のことは、普通のお話として話し合ふには、もつたないほど神聖なんですから。學校でこんなことを話し合ふ子供は、男の子でも女の子でも、下品な卑しい生徒だと

いはれます。もしお前が、君はどうして生れて来たのかと聞かれたなら、僕は知つてゐるけれどもお話ししたくないとお返事なさいね。そして、そんなことを聞いた子供とは、もうお友達として遊ばないやうにしない。……お誕生のことに就いては、決して／＼お他家の人に尋ねてはなりません。もし何か尋ねたいときがあつたら、お母さんのところへいらつしやい。さうすれば、何でも喜んで教へてあげますから」と。

この教訓をすると共に注意すべきは、子供の體のどの部分へでも手を附けて弄ぶことを絶対に禁ずるやうにせねばならぬことである。

(三)七歳乃至十歳の子供、子供の能力から考へて見て、性的啓



發を本當にやり始めるに最も適當な時期は、この時代である。  
この時代に於ては、十分修養ある両親か、または學校の先生が、植  
物に於ける蕃殖の理法を教へるがよい。その内容の大體は、  
(イ) この大地が如何にして種子を温めまた濕ひあるやうに  
保護するか。かよわい芽が、光と空氣の中で成長し、花を開  
き實を結ぶまでに、どれほどの恩惠を大地から受けるかを  
教へること。

- (ロ) 生命の根源は、植物にせよ動物にせよ、皆細胞であるといふことを教へること。  
(ハ) 細胞を適當に詳かに説明すること。  
(ニ) 生物は、無生からは、決して生れないこと、即ち必ず親があ

るといふことを教へること。

- (ホ) 蕃殖の種類たる分裂蕃殖、芽出蕃殖、兩性接合蕃殖(兩性生  
殖の第一歩)などを教へること。

- (ヘ) 有花植物の成熟に關して、有花植物の蕃殖器は露出して  
ゐること、花は蕃殖にあづかるすべての器官を一括して現  
はしてゐること、及び各々の器官(萼、花瓣、雄蕊、雌蕊)を分解的  
に説明すること。

- (ト) 花粉傳達の方法に、風によるもの、昆蟲の媒介によるもの  
などのあることを教へること。

- (四) 十歳乃至十三歳の子供、子供が植物の蕃殖をよく理解し、  
男性、女性、胚珠、子房など、いふ語に慣れたならば、よく注意して



別に躊躇することなしに、動物界に於ける性的現象を教へるがよい。その教ふべき事項は、ほゞ次のやうなものである。

(イ) バクテリアの如き単細胞動物に就いて、原形質、核と細胞質との二部分から成るの説明と、その分裂を教へること。

(ロ) 下等動物の蕃殖方法(母體が、二つの相等しい部分に分れるもの、發芽によるもの、發胞法によるもの、及び細胞核の物質を、甲乙兩個體で交換し合ふもの)を教へること。

(ハ) 兩個體の接合方法(滴蟲類に見られるやうに、二個體が近く寄り合つて、體の一部分を觸れ合せ、お互に核を二分して、その一方を相手の方に送り、残つてゐる一部分の核を結合せしむるもの、單細胞動物が、融合してしまつて、再び離れな

いものなど)を教へること。

(ニ) 一歩進んで、卵細胞と精子細胞(この二つを性細胞といふ)との區別の生ずること、及び兩者の機能を教へること。

(ホ) 雌雄兩性具有の動物と、卵細胞と精子細胞とが別々の個體にある動物(これが高等動物である)との別及び卵細胞を作る個體を女性といひ、精子細胞を作る個體を男性と呼ぶことなどを教へること。

(ヘ) 高等動物の蕃殖方法を教へること、及び親子間には、常に幾分の變異のあることを注意すること。(氏はこれに關して詳細な説明をしてゐるが、今はこれを略する)

(ト) これ等を教へ終つた後は、一寸の暗示によつて、人間の生



殖方法を理解し得るから人間の蕃殖に就いては、すでに授けた知識や法則を適用せしむるやうにすればよい。

(五)十三歳乃至十六歳の子供、この時代の教育事項の主なるものは、月経と漏精と手淫との三つに關してである。子供が十三歳頃になると、性的成熟の徴候があらはれる。即ち男の子には漏精、女の子には月経が始まる。もし豫めこれ等に關する教育がなければ、彼等は突然これ等に面接することになつて、非常に驚く。そして、友達同志の打ち明け話となり、悪くすると、女の子は手淫、男の子は女郎買といふ惡癖に染まることになる。特に年の若い女の子は、普通、月経を不可解のものに考へて、非常に驚きこはがる。性的機能は、婦人を生理的に苦しめるものであ

ることを注意せねばならぬ。

(イ) 月経に就いての教授。月経の生理的意義——ブリュッゲルに従へば、月経は、成熟した卵子が、母體組織に結び附けられて行くところの造化の接木である——。月経の始まると同時に卵が生じること。月経と等しいものが他の動物——胎兒と母體との組織が緊密な關係を以つて居り、出血しなければ、母體から胎盤が離れ得ないやうな動物には、皆月経を見る——にもあること。月経時の生理的及び心理的變化。これ等に關して注意深く、詳かに説明し、女としての負擔をよくよく理解せしめること。

(ロ) 少年には、漏精に就いて教授せねばならぬ。漏精の生理



的意義。(女子にも夢精といふものがあるが、それは、通常意識に残るほど明瞭ではない。然るに男子に於ては、これが明瞭で、満足の感と快感とを與へ、自分でよくこのことを承知するやうになるのである。)一ヶ月に、一二回、漏精や夢精の起るのは、病的現象でないといふこと。これ等に就いて、親切な教訓をすることが大切である。

(ハ) 春機發動期に於ける、兩性を通じて起る二つの衝動に就いての教授。一つは、萎縮の衝動で、特に男子の方に強いのである。これは、大小便を催して來るときの感じと酷似してゐる。もう一つは、收縮の衝動で、女子の方に特に多い。これは、一個體をして、異性の個體に近づかせ、それに接觸して愛撫

せしむる性質のものである。これは、また人の身の上を懷ふとか、文をかくとかいふやうな傾向の中に、おのづから現はれて來る。この二つの衝動は、モル氏によると、性的本能を形造るものである。春機發動期に於ては、腦系統と生殖系統との間に、激しい闘争が起ることなどを教ふべきである。

(ニ) 前記の二つの衝動の爲に、少年や少女は負けて、やゝもすれば、手淫を行ふやうになり易い。それで、これに關する教授が必要である。第一に、父兄や教育者は、手淫の癖に陥るのに、三期(幼兒期、小學校の時代及び春機發動期)あることを心得ておくことが大切である。第二には、春機發動期の時代が、最も多く、これに陥りやすいことを知つておくこと。これに就い



て注意すべきことは、色々あるが、たゞ時々の警戒だけでは足りない。まづ秩序ある活動を行はせること、永く坐せしむるのを避けること、坐り方(殊にいけなひのは、兩脚を重ねること、椅子に馬乗りになることなどである)に注意すること、大小便を永くこらへしめるのを避けること、戀愛文學、春畫及びこれに類するもの、及び野卑な芝居等に遠ざけることなどである。もしすでに惡癖に陥つたことを知つたならば、これを行ふやうな機會を、決して與へないやうにすることが必要である。例へば、眠つてゐないのに、床の中に寢させておくのを禁ずること、便所や湯殿などに、長く留まらせないこと、たとひ同性であつても、同じ床に寢させないことなどを始め、彼等の行爲に

細心の注意を拂ふことが必要である。殊に青少年の集る學校では、年長者が、年少者に對して抱く感情に注意することが肝要である。なほ、手淫が生理的、心理的に、極めて有害な所以をよく知らせることを努めねばならぬ。

(六)十六歳乃至十八歳の子供。この時代の子供に教へる事項は、痲病と徵毒と制慾との三つである。性的問題に關する最終の教訓は、少年や少女が、ほゞ十六歳から十八歳頃に達した後與ふべきものである。この年頃になると、近代の社會状態からいふと、大抵のもの(女子も或る程度までは含まれる)は、社會に出て働くのである。従つて彼等は、比較的、多くの誘惑に近づくことになる。即ち、彼等の貞操は、危險にさらされるのだ。そこ



で我等はこの際、まづ第一に、花柳病の危険を彼等に悟らせねばならぬ。——花柳病の個人的、社會的害毒、及び子孫に及ぼす悪影響、放蕩せずとも、ペンや鉛筆などからさへ、感染することなども含めて教へること——(氏はこれ等に關して詳細な統計を擧げ、その病狀の進展等を説いてゐるが、今はこれを省く) 花柳病の害毒をよく教へ込んで、彼等自身をして、無思慮な本能的行爲に出でないやうに制慾せしむることが必要である。

以上は、タルミーがその著「創生」"Genesis" に於て、説いてゐるところの大體である。私は彼の説くところが、悉く今日の時勢、特に我が國に於ける教育上に適用されるとは考へないが、得るところの、少なからざるべきを痛切に感じたので、大分長くは

なつたが記したわけである。

二、タルミーの外性教育の教材に關して述べてゐるものは、多數あるが、それ等は、彼の説くところと大同小異であるか、または一部分に關するものであるかの何れかのやうに思はれる。故に、タルミーのいふところを理解すれば、大體はよいやうにも思はれるが、併し本書の目的とするところ、即ち、なるべく多くの人の主張を明らかにするといふ立場から、なほ二三の主張を掲げることとする。

(一) 年頃の男女(主として、中學校三四年生、高等女學校二三年生)に教へる材料。身體と精神。心身の相關。年頃といふこと。年頃の男女の身體。自己保有と種の保存。女子特有の衛生。



年頃の男女の精神。種の保存と性慾。性慾と結婚と戀愛。接觸と不倫と不自然。不自然なる性慾満足。自慰の害。自慰と神經衰弱症。不倫なる性慾満足と花柳病。花柳病の種類。性的惡癖の豫防とその矯正法。小説及び雜誌。各種の興業物。習慣の力。意志の力。友人の選擇。

(二) 小兒の幼年期に於ける教育。エリスは、母親が小兒の幼年期に教ふべき主なることは「彼女自身と子供との親密な關係を明瞭にし、すべての子供は、彼等と同じやうに親密な關係をもつてゐることを示すにある」といひ、なほ語をついで、「個々の生命の本源を説明する爲に、この點に就いて、卵が最も簡單な最も基本的な型であることを一般化するにある。何故なら、卵

の觀念は、——種子と同じく、廣義の意味に於て——人間に對する眞理をもつてゐるばかりでなく、動物や植物の世界を通じても、適用し得られるからである。この説明をなすに當つて、父親と小兒との生理的關係は、最初に説明する必要はない。その關係の説明は、更に後年まで延してもよいし、小兒の疑問が、そこに至るまで打捨て、おいてもよいのである。……小兒は、自己、他人、姉妹、兩親等の生殖器に對して興味を抱くものである。これ等をば、母親は明確な名稱で呼び、小兒の單純な、自然な、好奇心を、單純に自然に満足させてやるべきである。……生命の起原と彼自身、の肉體とその機能とに就いて、子供と語るに當つて、方法が如何に初歩的なものであつても、母親は性的知識と共に、性的衛生



學をも教へ得るであらう。……」といつてゐる。なほ彼は學校に於ける性教育、發情期以後の性教育などに就いて述べてゐるが、大體に於て、さきに述べたタルミーの說と同じであるから略して置く。

(三) また或る人は、十歳以後の學校の兒童に、性的生活の事實を教へようとするとき、「嬰兒誕生の圖を彼等に示してやつたり、まづ最初に性的不規則の危険を明白に解釋してやるべきである。少年等を、花柳病の結果を參觀させる爲に、病院に連れて行くべきである」などといつてゐる。

(四) 更に、實際に行ひ、または行ふがよいと主張されてゐる教訓の例を右に掲げよう。

(イ) スリーヴァン嬢の小兒出生に關する説明の例。

妾は先づ、麥や豆の類が夫々其季節に蒔きつけられ、地中の暖氣と濕氣とに養はれ、日光と空氣とに觸れても差支ないほどになつてから、芽を出し、呼吸し、成長し、花を開き、實を結び、其實が再び地中に蒔かれて、植物となる順序を兒童に話しました。それから植物の生活と動物のそれとを比較し、種子は恰も鳥類の卵と同じく、親鳥が此卵を雛鳥が生れるまで暖かに抱いて居るすべて生命は卵から生ずるものと説明し、母鶏は卵を巢の中へ生み、雛鳥が生れるまで、暖かに抱き、魚の母親は、その卵を小さな魚の生れるまで、温氣のある安全な所へ生みつけて置くと説明し、卵は生の始であることを了解せしめ、次



に犬や猫や人間などは卵を産まない代りに、その胎内で子供を養ふことを話しました。(小兒から「私はどこから生れて來たの」と尋ねられたときの答)

(ロ) フェルスター博士の、十二歳の兒童に對して、母親の教訓すべきものとして擧げたる例。

太郎さん：あなたは、もう立派な少年になりました。今日はあなたに、非常な真面目な大切なことを話さうと思ひます。一體赤ん坊は、どこから來るのだらう。そんな問を太郎さんは、もう何度か起したでせうね。鴻の鳥が赤ん坊を連れて來て呉れるといふお伽噺などは、もう本當にはしますまい。お母さんが太郎さんの眼の中を睨と視ながら、太郎さんといふ

ときに、お母さんは、可愛がつたり、世話をしたり、育てたりするために、太郎さんを授けて戴いたことばかりを思ひはしません。そのほかに、鴻の鳥の話などよりもつと美しい、或ることを思ふのです。それは全く本當のことで、しかも太郎さんには最初何うしても本當と思はれさうもないことです。何だか知つてゐますか。太郎さんが思つてゐるよりも、つと前から、お母さんと太郎さんとは、お互ひに識り合つてゐるので、すよ。太郎さんが生れる一年位の前から、つと二人一緒にゐたのですよ。左様いふと、何うしてそんなことがあるだらう。と不思議がるでせうが、まあお聞きなさい。春花の夢の奥の方に隠れてゐた植物の種子が、夏の終りや秋になると、熟



し切つて地の上に落ちたり、それでなければ綺麗な綿のやうな糸のやうなものに乗つて、飛んで行くのを見たことがあるでせう。丁度その種子と同じやうに、太郎さんは、お母さんの胸の下のところで、長い長い月日の間眠つてゐたのです。

ですから、何うしてお母さんには太郎さんが可愛くてならないのか、何うして太郎さんがお母さんをそんなに慕ふのか、その理由も自然わかつて来るでせう。わたしたち二人は、切つても切れない関係がある。身體も一つなら心も一つなのです。それから何うでせう、太郎さん、お母さんが大苦しみをして、太郎さんを生んだ五六ヶ月前に、お母さんは、自分の身體の裡で太郎さんが生きてゐる事に氣が付いたのですよ。左

様してお母さんは、太郎さんに血や肉をわければかりでなく、太郎さんの小さな魂が清らかに強くなるやうにといろ／＼望みました。お母さんは、自分の心を信心深い考で一杯にして、その考が善い天使のやうに太郎さんの上に降りて来て、眼をさましたか、けた生命を祝福するやうにと祈りました。

斯様いふと太郎さんは、小さな人間の種子のやうにお母さんの身體の裡に眠と幾年も眠つてゐた自分が、何うして不意に眼をさまして外へ出ようとしたのか、其理由が知りたいと思ふでせう。春植物の種子を地面から這ひ出させるのが太陽であるやうに、太郎さんに眼を覺させたのも、矢張り太陽でせうか。左様です、たしかに太陽です。お母さんに對するお



父さんの愛情、これが太郎さんを生かした太陽なのです。自分の身體の裡に、新しい人間の種子を持つてゐるのは女ばかりでなく、男も左様なのです。茲所は植物の花とそつくりなのです。花は大抵の場合、女の花が男の花の花粉を受けて、實を結ぶのです。花の上を渡る風が、花粉を一つの花から他の花へ運ぶか、蜜を採りに来る蜂などが、男の花の花粉を身體につけて、女の花の中に這入るかして、はじめて實を結ぶのです。花によつて、蜂などに斯様いふ手助けをして貰はねば實を持つことの出来ないがあります。無花果の樹を植ゑるときは、無果の花粉をいつも運ぶ蟲も、一緒に連れて來ないと、全く實を持たないさうです。

けれども植物と人間との間には、そんな小さな類似がありますが、一方には際涯もなく違つたところがあります。植物では男の花と女の花の間に、愛情といふものがあります。とこ蟲の働きや風の方が、二つの花を合せる丈けの話です。ところが人には女に對する男のやさしい愛情があります。男と女とこの二人の心がびつたり合つて、そこで一人の新しい人間の種子が出來上がるのです。その男と女云ひ換へれば、両親の顔形や性質を混ぜ合せて承け繼いだ、人間の種子が出來るのです。二人の人間とその間に起る愛情と結びついて、それから第三の新らしい人間が生れ出るときが、本當の結婚といふものなのです。さうして何處のお母さんも、それはそれ



は、云ひやうのない、命懸けの大苦しみをして、自分の體から子供を出すのであるといふことを聞いたならば、太郎さんは、はじめ、お母さんと子供とが、この世の中で一番つよい愛の力で、お互ひに結びつけられてゐることが、はつきり判かるでせう。

太郎さんは今もう何も教はつたのです。これからは屹度、いろ／＼な危険に、注意して避けるやうになりますよ。自分の身體と心でもつて、お父さんやお母さんになれるといふのは、何ういふことなのだか、まるで判らない少年少女がよく出會ふ危険を避けるやうになりますよ。虚弱な身體や心から生れた子供は、眞張り虚弱な身體や懦弱な心を持つてゐるも

のです。一人の人間の身體や心の裡のよいところや悪いところ、強いところが、のらこず種子の裡に混ぜ合はされて、その種子から新しい人間が出来上るのです。ですから太郎さんは、毎日自分の身體や心を鍊へるばかりでなく、太郎さんの子孫の身體や心を鍊へる譯ですよ。太郎さんが今持つてゐる綺麗な濁りのない心は、この後、何時か太郎さんをお父さんと呼ぶ子供に、その儘傳はる譯です。

それだけ話をすれば、人間の種子から、子供をこしらへる部分の話をするのを遠慮しなければならぬ理由が、太郎さんにはよくわかるでせう。左様いふ部分は、清浄な神聖なものと思はなければいけません。神様が造へになつたもの、



中で、一番安全に出来てゐるからではないのです。左様いふ部分をよく保護して、輕卒な考や惡戯の道具にしたり、病氣になつたりしないやうに氣を附けることが、太郎さんの後から生れて来る數限りもない大勢の人間を、幸福にすることになるからです。

それですから太郎さん、學校や往來で、お友達が、あなたが汚ない行儀の悪い話を一緒にしないと云つて馬鹿にしても、あなたは決して自分の潔白なことを、恥かしいと思つてはなりませんよ。左様いふ時にはいつも、「僕が知つてゐる丈けのことを、彼の子達が知つてゐたならば、彼の子達は、彼様いふ風に話をしないだらう」とかう思つてゐればよいのです。

(ハ) 左近義弼氏の例。

□花の例

「おかあさん—僕はどこから生まれたの」と問はれたら、「まづ後から靜かによく教へてあげませう」と答へておき、深く考へ、十分に手廻しをしておいて、さてその子を一室に招き、己が膝に抱き寄せて、靜に神に祈り、それから、まづ梅なり桃なり又は其節の草なり、何にても手近な花を取り、その花瓣に包まれる雌蕊と雄蕊とをしめし、雌蕊の蜜と雄蕊の粉との接觸、その接觸よりして、雄精が雌蕊の中をつたひ下り、萼に藏められて居る種子に入りておちつき、成長して熟し、熟してその種類を後にのこし、ますます殖えしげる道理を教へるのを始めと



して、次第に一段と上級の生物に説き及ぼすがよい。そして蠅、蟪、蛤、蛙、金魚、鯉、雀、龜、鼠、雞、猫、犬、牛、馬と上へ上へと人に説き上らねばならぬ。

## □ 鶏の例

一の卵をわつて、茶碗にいれ、その白身と黄身とを示し、その白身が雛の骨や皮になる事を告げ、さてその白身の中に特にとろりと筋だつた小さい固まりを取り、その固まりが牡雞から來た雄精なのを知らしめ、この雄精のない卵を牝雞が生んでも其は、「草卵」と稱へられて、いくらあたためられても、可愛い雞にはならぬ、末は腐つて仕舞ふことを教へる。

又同じく卵で子を生む動物の中にも、龜の類、或は遠いアフリ

カの駝鳥などは、その卵を暑い砂の中に埋めておけば、そのまま太陽の熱でかやされるが、大概の鳥は親鳥の羽でだきぬくめられて、皆雛のやうに雛となる、しかし卵で生れないで、親の形で生れ出る者も、初め皆腹の中で、雄の精が雌の卵に吸付く當座は、やはり卵の形であつたのが、永い永い間に、だんだんと親の形に發達し、いよいよ生れ出る時には、ちやんと親と同じ形の子になつてゐる、そして人は諸の動物の中で、一番上等であるから、まあ幾億と數かぎりもない生物の中で、割合に永く母親の腹にゐて、そして生れてからも、一番永く乳を飲んで、一番永く育てられて、一番永く教へられて、やつとのこと、大なるので、人ほど其子が永く厚くその親の世話になる者は外



にはない、人として親子の間柄の最も親しいのは、親の苦痛が他の動物よりも非常に烈しかったからである。

□人の例

牝雛が卵をお臀から生むやうに、人の母親にも子を生むべき口が女寶の中にある。言ふまでもなく子を生む時は、何にも比べようのないほど、人の最も痛い苦をするのであるが、母親が子を生む時には、その女寶の筋がのび、口が開いて、怪我をせずに子を生まれるやうに、神がちやんと女の身體を造つてあるから、常に身體を大切に養つてさへおけば、少も怪我をせずに子を生んで、生んだ後で、又筋がちぢみ、口がすぼんで、元の通りの身體になる。かやうにして誰でも子供は皆母親の腹に四十

週間ゐて、生れてから尙、母の乳を五十週間飲んで育て上げられたのだから、決して母の恩を忘れてはならぬ。

太郎—お前もやはり、おとうさんの精がおかあさんのお腹の卵と結び合つて、一人の身體となり、十分に熟してもう外へ出ても大丈夫な時に、神様からの生命がやどつて、おかあさんから別れ出たのよ。そしてこの乳を飲んで、こんなに大きくなつたのね—、大きい善い子に—お前の髪一筋も、血一しづくも皆おとうさんやおかあさんから譲り受けてるのだから、大事にすることよ—大事にしてもつと大くなつておとうさん(女の子ならばおかあさん)のやうになるまでも、一生死るまでも、死んでからも永く永く愛し合ひませうね—ほんとうに可愛



いこと——おとうさんやおかあさんの生命の緒なの——  
 以上で、大體何を教ふべきかといふことに就いては、述べ終つたつもりである。これ等を参考として、我等は更に自分の教材を選択せねばならないのである。今述べたことの中には、教へ方及びその注意なども交つてゐるが、どうも、これを切り離すことは不可能のやうに考へられたから、やむなく一緒にしたのである。

◆誰が教ふべきかの問題。これに關することも、上來述べたところによつて、大體理解されたと思ふ。人々によつて、少しづつの差異はあつても、——詳細に考へれば、相違のあるのが當然であるが——大體に於て、諸説は一致してゐるやうである。即ち

學齡以前にあつては、主として、家庭に於て、母親がこの教育に當り、學齡以後に於ては、家庭に於ては、母親が、學校に於ては、家庭とよく連絡をとりつゝ、教師が——擔任の先生、修身の先生、博物の先生、そして女兒に對しては、女の教師、男兒に對しては、男の教師、卒業に際しては、卒業生一同に、學校長が——これを行ひ、更にこの間に信用ある醫師、女兒に對しては、女醫、男兒に對しては、男醫の助力を乞ふことといふやうな意見に一致してゐるのである。なほ西洋に於て、宗教の教師等が、これに關與しつゝあるのは、注意すべきことである。

要するに、性教育を施すに最も適してゐるのは、家庭と學校とである。併しこゝで考慮すべきことは、すべての家庭、すべての



學校が——結局、家庭に於ける親達や、學校に於ける教師達が——皆、この教育に適してはゐないといふ點である。かやうな問題は、教へるものに、それに就いての自信と手腕とがなければ、色々の弊害を惹き起すことになるから、その教材に於て、その方法に於て、十分な選擇及び修養を要するのである。

現に小西重道氏なども「瑞西の中學校などに於ては、已に學校の規程として、性教育を施して居るといふことであるが、中學の凡ての教師が、其教授に堪能であるとも考へられない。ボン大學などにも、言語學の講演に出席する學生は、多く中等學校の古代語の教師となるといふので、先年來、是等の學生に對し、性教育に關する講話に、出席すべき義務を負はしたといふことで

あり、伊太利などに於ては、師範學校の教も、育此點に就て大なる注意を拂うて居るといふことであるが、古代語の教師や小學校の教師が、全部性教育の擔當者となり得るかは疑問である。」といつてゐる。

なほこの問題に關聯して、「學校醫會を開いて、兩親と教師及び學校醫との連絡をはかることや、學校醫が時々評議會を開いて、兩親に種々の説明をなし、或は兒童に兩性の區別を説明しなければならぬ。」と説くものもあれば、また、「この現實の問題に對して、建設的態度をとり得るだけの素養を有し、並にその困難なる材料——性教育の本質や範圍や目的——に就いて、十分に素養ある兩親は頗る少なく、多くのものは、事實上の無智、または個



人的偏見をもつてゐる。」と論じて、教育者その人からの教育を必要としてゐるものなどもある。

◆ごんな風にして教ふべきかの問題　これは教へる形式の問題である。教授の形式に就いては、色々の分類をすることが出来るであらうが、これを個別的と團體的との二つに分つて考へることは、また一つの見方である。さて、性教育に關して、この二つの形式の、何れをとるべきであるかといふことは、上述の多くの事項から、おのづから判明するであらうと思ふ。即ち、すでに述べた通りに、かやうな問題は、詳細に考へれば考へるほど、愈々特殊的になるべき筈のものであるから、一般的にこれをいへば、どうしても個別的になさざるを得ないといふことになるの

である。併し團體的教授形式が、全然適用され得ないといふのではない。

この方法を用ひても行ひ得るし、また効果のあることもある。結局、教材の性質、深さの程度如何等によつて、その方法は、自然異つて來ると見てよいのである。エリスは、學校に於ける博物の教授のときに行ふ團體的性教育に關して、「かゝる教化は、形式的であり、非情緒的であり、非個人的でなければならぬ。それは性の問題に於ける特別な教化として與へられるのではなくして、たゞ、自然史の一部として與へられねばならぬ」といひ、生理學の教授に關しても同様のことを考へてゐるらしい。まことに彼の考へる通り、團體的教授に於ては、非情緒的な一般的理法



の教授に主目的を置くべきであらう。また道德教育に、主として携はる教師の團體的性教育も、また同じやうな注意が必要であらうと思はれる。併しこの場合の主目的は、博物教授などの場合と異つて、愛の合理化または純化といふことにあらうと思ふ。即ち盲目的本能的愛をして、合理的愛たらしめ、動物的愛を變じて人間的愛——これを私は愛の純化といふ——たらしめねばならぬ。

個別的教授の方法は、上に掲げたタルミイを始めとして、多くの人々の唱へる具體的實例を一讀すれば、おのづから了解し得るであらうから、また重ねて説く必要はあるまい。たゞ、一つくれぐれも注意すべきは、なるほど個別的教授の場合には、或る程

度まで深入りすることは可能であるし、また必要でもあるが、併し、徒らにすべてのことを知らしめようと企てるのは誤りである。必ずや、子供の發達過程に應じ、また求知心の深淺に應じて、或る程度に止め、更に他日を期してゐなければならぬといふことである。これに關して、「その解説の範圍、方法、時などは、両親及び子供の個人性によるべきである。徒らに知悉することを過重するは戒めねばならぬ。これ、思春期以前の性教育は、性情陶冶の一手段たるに過ぎざるが故である。」といつてゐるマッテウス・デルの忠告は、傾聴に値するものといはねばならぬ。



直接的教育の方面は、まづこの位に止めておいて、次に間接的方面に就いて述べよう。こゝに間接的方面といふは、直接的方面が主として性的知識の啓發を目的とするものであるのに對して、一般的にいへば、主として、少年や青年の環境を整理して、性慾發動の機會を出来るだけ少なくし、従つて、彼等をして、性的汚濁に陥らざらしめるやうに注意する方面を指すのである。

性教育といへば、多くの人々が、前述の直接的方面のみを考へて、こゝに私が問題としてゐるところの間接的方面を忘れる傾向があるが、これはいふまでもなく誤つた考へ方である。直接的方面が重んずべきであるならば、またこの方面も、等閑に附し得ない重要さをもつてゐると認めねばならぬ。否、むしろ考へや

うによつては、この方面の方が、より基本的であるともいひ得るのである。もしこの基礎が、完全に確實に築かれて居つたとしたならば、その上に建てらるべき直接的方面といふ建造物は、完全に堅固に、その使命を全うし得ることになるであらう。私はいかやうに、この方面を重んじてゐるものであることを特に述べておく。

さて、この方面に於て注意すべきことは、さきにも述べた通り年齢により、境遇により、更にまた個性などによつて、種々の考へべき部分があるが、今は極めて一般的のことのみを記すことに止めておく。蓋し、特殊の場合には、これを基として推測し得るが爲である。



一、小西重直氏の説 一般的に性本能の教育には、また間接の教育法が必要とされて居る。例へば、ホルル氏なども論じて居る様に、體力の鍛錬増進とか、規則正しき安眠とか、主として體育衛生に關する注意は勿論であるが、常に何物かを捉へんとして居る青年の活氣に對して、何等の興味も感情も刺戟も與へない様な教育は、性本能を邪道に導き入るゝ恐れがあるであらう。感情生活の旺盛なる青年に對して、清純なる感情教育を怠る場合も、また同様の結果に陥らしめ易いことになるであらう。剛健の氣風が缺けて居る場合の如き、固より然りである。

二、タルミハの説 彼はさきに引用した著書に於て、各年齢毎に、間接的方面を述べてゐるが、今は、その一二を掲げることにする。

る。幼兒期に於ては、あり餘るほど食べさせたり、柔和に育てたり、着物を着飾らせたり、蓮葉に育てたりすることは、徒らに子供をして、おしやれにさせるのみでなく、母の虚榮の玩具になつて、悪くなつたり、柔弱になつたりするだけであるから、かやうなことは、嚴重に避けねばならぬ。また甘やかして育てたり、きりつめた着物を着せたり、芝居の眞似をさせたりすることを避け、子供が舞踏をしたり、假面劇などするときには、特別の注意が必要である。

それから、寢床を餘り軟かくしたり、または蒲團を餘り重くしたりすることは、しない方がよい。子供を眞直に寝かし、手の位置に注意し、朝起きるとすぐに、着物を着換へて便所に行くやう



にさせ、寢床に長く眼を覺ましてから居らせないやうに心掛くべきである。すべてこれ等は、子供をして、局部を刺戟し或は弄ぶ機會を與へないやうに考へるところの親達が、大いに注意すべき點である。……少年が自瀆に陥ることを防ぐ方法は、まづ使用人によく心を配り、生殖器の清潔に注意し、食事は出来るだけ選擇して、例へば夕食は軽いものを與へ、香料刺戟物ではないもの、酒精の入らぬ飲料などを用ひ、その他堅い蒲團の如き適當な寢具を與へ、且つ軽い猿股といふやうな適當な衣類を着させることなどである。

三、ヒッスの説 ……すべての種類の運動や遊戯は、兩性の若い人々に對して、疑ひもなく有益である。……それは、これ等が性的

衝動が生むエネルギーを散らすことによつて、性の表現を抑制しやすいからである。それ相當の理由があつて、性的活動を禁ずるか、または減少するかは、有效なものとして、主張されるところの多くの肉體的規則や豫防がある。熱の逃避と冷の養成とは、これ等の中最も重要なものゝ一つである。暑い氣候、密閉せる空氣、重い蒲團、熱い風呂、これ等はすべて性的組織を刺戟しやすい。……衣服と體の姿勢とは、またこれに影響がある。性的部分の附近の壓縮は、性的刺戟の原因である。

脊椎中樞を充血させる仰臥は、性的衛生に心を用ひた人々によつて、久しく知られてゐる通り、また同じ方面に働くものである。例へばフランス教團の規則では、仰臥することが禁ぜら



れてゐる。食料と飲料とは、なほ一層強い性的刺戟物である。……就中火酒、リキユール酒、泡立つ重い葡萄酒及びビール、のやうなアルコールに就いて、一層眞實である。精神的訓練は肉體的訓練に似て、往々性的亢奮を鎮める方法として主張されたが、それは、その活動上曖昧のやうである。……或る夫人は書いてゐる「私は算術とか幾何とかの問題を解くやうな機械的な心的仕事を試みた。が併し、それは何の役にも立たなかつた。事實それは、たゞ亢奮を増すやうに思はれる。」と。

また或る僧は書く、「私は私の性的傾向を防ぐ目的で勉強し、殊に數學に私の注意を向けた。或る程度まで私は成功した。併し一人の古い友の接近で、一聲または一觸れて、これ等の傾向

(性的傾向)は、また新らしくされた力を以て戻つて來た。けれども私は、數學が大體に於て、私の注意から女を取り去る最もよいものであると思ふ。私が若かつた頃試みた宗教的訓練よりも更によい。」と。併し、これ等の企ては、單に一時的效力のものであるといひ、そして最後に、ハーバート・スペンサーの語を引用して、「曲つた鐵板を滑かにする爲に、その曲つた部分へ直接に槌を下ろすことが、何の役にも立たないことをスペンサーは指摘した。即ち、もし我々がそんなことをするならば、我々は、たゞ一層事を面倒にしたことを發見するであらう。效果あるやうに槌を下ろすには、周圍よりすべきである。決して直接にしてはいけない。さうすることによつてのみ、鐵板は滑かに打ち延ば



される。」といつて、すでに悪習に染つたものゝ矯正方法の原則を擧げてゐる。

四、また或る人は、無刺戟性食物、煙草や酒類の廢止、日々體力を練ること及び冷水浴は性的活動を抑制する効果が大きいといひ、また他のものは、性的覺醒の時期は、暴風の如き急迫的性質を示すときであるから、このことをよく理解して、性急ならず、寛嚴その度を失はず、目的觀念の明らかなる誘導により、悪影響の少なきやうに保護し、學校教育に於ても、この時期に、もし一生徒が一時的に成績不良となり、注意力が減じ怠惰となり、能力が弱くなることがあつても、直ちにこれを以て惡意に解することなく、成るべく心氣を他に轉ぜしむるやうに注意するがよい。ま

た身體上の衛生としては、營養に注意し、新鮮なる空氣中にあること、沐浴や體操遊戯を適當にせしめ、一般に過勞を避けるやうに心掛けねばならぬ。そして最後に、特に注意すべきは、迷想的宇宙觀や人生觀を鼓吹する書物を禁じ、人間罪惡を説く牧師や僧侶を避け、小説、芝居、活動寫眞、戀愛に關する詩文等を斷つことなどに努むるがよいといつてゐる。

私は、以上の諸説が説くところは、少しづつ、差はあつても、主とするところのものは、皆同じであると考え、考へてよろしいと思ふのである。それで、まづこれ等を統合して、間接的方面として、我等の注意すべき事項を考へて見ると、凡そ次のやうになるであらうと思ふ。



一、餘りに多く、知的作業を強ひて課さないこと。殊に春機發動期に於て然りである。

二、書物の選擇に注意し、美的趣味の養成に留意すること。

三、情緒の變動の多いとき、生意氣で怒りやすいやうなときには、父兄や教師は、これにつられて、やつきとなつてはならぬ。深い同情心を以て、忍耐強く教育せねばならぬ。

四、なるべく芝居や活動寫眞等には遠ざけ、一定の精神的または身體的仕事を課して、ぼんやりしてゐる時間をなくするやうに努めること。

五、刺激性の飲食物を與へないやうにすること。

六、衣類や夜具等に注意すること。

七、運動の種類に氣を付け、無暗に過激のものを行はしめないやうにすること。

八、規則正しい習慣をつけ、安眠せしめ、清純な感情教育、剛健な氣風の養成等に心掛けること。

九、出来ることなら、相當の年齢に達した子供と、兩親との寢所を別にしたいものである。理想的にいへば、一人一室にしたらよいと思ふ。少年は仲々敏感なものである。卑猥な言動繪畫等は固より悪いが、不用意の間に知らず識らず、少年の性慾を亢奮させることが往々ある。殊に女中や書生を雇つてゐる家庭や、看護婦をよく醫家などでは、この方面の注意が肝要である。一體看護婦を志願するものの中には、随分變態性慾をもつたも



のがある。例へば、男の或る種の病人の苦しむのを面白がつてたゞその爲に看護婦になるものもあるといふことである。

月經の期間に於ては、諸種の能率の上に種々の影響を與へるものであるから、女子の勉學、勞働、執務等に於ても、この期間に於ては、やゝ調節を要すべき點をもつてゐる。この期間の不攝生は、直接、婦人病その他の疾病の原因となることは、汎く知られてゐる事實である。……その期間は最も長いものは十日に亘るが、これを例外として見れば、八日に亘るものは少數ながらある。最も短いのは二日であつて、三日乃至七日を通例とする。

—青木誠四郎氏の研究による—

### 第九 性教育の難易に關する説

以上私は、種々なる方面から、性教育の必要やその方法等に就いて述べたのであるが、そしてまた、積極的に性教育を施すことは、我等の努むべき新しい方面であることを認めたとのであるが、同時に我等は、これには、多くの困難な問題の存することを注意せねばならぬ。これに就いて發表された多くの主張の中、殊に著しいもの一二を擧げて、實際問題として考へるときの參考にしたいと思ふ。

或る人は、かういつてゐる。性教育論の流行は、知らぬことはない。けれども實際教育の上から見れば、觸らぬ神に祟なしの



態度でゐるのが最良法だと思はれる。性慾はたとへば蜂の巢のやうなものである。とやかくと、これをかき亂せば、蜂は群り起つて人を刺すやうになる。放つておけば、彼等は進んで何等の害をも加へようとはしない。何といつても、色食は天性最強のものである。青春の血の漲るときに、人は木の葉が飛んでも笑を催すほど鋭感なもので、それは殆んど生命の中心を成してゐる。然るに露骨に適切に生殖作用の如何を説くに至つては、多感な青年の神経を刺戟すること甚だしく、たとひ性慾亂用の大害を知り得たにしても、その大害それ自身の實驗を試みんと衝動を起すに至るは必然である。怖いもの見たさの心理作用は、この場合猛烈に働き出すことを知らねばならぬ。

世の多くの人は、行爲を惹起するに當り、二種の力の働らくことを注意せぬ。即ち其の一は自然的な力で、之れを期成原因 (efficient cause) と云ひ、他の一は人爲的な力で、之れを目的原因 (final cause) と云ふ。前者は言ふ迄もなく、然らざるを爲さんとする意志なくして、識らず知らずの間に其れに傾かせるもので、人が快樂を求め苦痛を避ける如きが即ち是れである。後者は然らざるを爲さうとして然らざるを爲すもので、意志的行爲は之れに當るのである。

今性慾の弊害を青年に教授したとする。弊害の知識は目的原因となるに相違ない。何人も自ら好んで、弊害を受けんと意志するものはないからである。けれども此の意志此の努力は、比較的弱い而して、猛り狂ふ色慾の暴威に抵敵することは出



來ぬ。兎に角刺戟されなかつた内こそ神妙に眠つて居た衝動も、今急に呼び醒されて遮二無三に満足されずには置かぬ勢を生ずる。而して盲目的に人を支配して仕舞ふが通例である。戀は思案の外とは善く言つたもので、一旦覺醒したとなると、戀といふ期成原因は、思案といふ目的原因よりも非常に強い。之れから推して考へれば、有害を知らしむるは、無意識にしておくに劣る萬々である。性慾教育論者の謬見は此理を知らぬに基く。

これは極端な反對論である。即ち根本的に性教育を不可とするものである。この議論に就いては、なほ多くの疑問とすべき點がある。例へば、この論者の性教育とは如何なる意義のも

のであるか。性教育の方法順序を、如何なるものと前提して論ぜられてゐるか。如何なる内容方法順序にかかはらず、性教育を不可とするものであるか。或はまた、論者の所謂期成原因と目的原因とは、如何なる場合に於ても、論者の主張するが如くに働くものか否か。論者は、如何なる具體的、經驗的根據によつて、これを主張するのであるかなどは、直ちに思ひ出されるものである。従つて、これ等の疑義を明らかにした後でなければ、俄かに是非を判定することは出来ないが、とにかく、頑固な根本的の反對論であることはいふまでもないのである。

また、性教育の必要も、その実施の不可能でないことをも認めながら、なほ且つこれに對して深い憂慮を懷いてゐるものもあ



る。即ち「性教育の主張者の研究は、餘程道理あることの様に思はるので、殊に其間接的な教育法の如きは、何人も異議のないことで、且つ實行上にも左程の困難はないのであるが、直接的教育として、一般の生徒に幼少の時代より知識的な性教育を施すといふことに就ては、餘程困難な問題が生じ來るといふことも無理ならぬ心配である。

即ち、非常に熟練せる指導者でなければ、知識を授くることによりて、却て性本能を挑發し、又早熟ならしむる恐れもあるのである。殊にピゲローの如く、科學的に遠慮のない態度を養成せんとして、理智的な啓蒙的指導を行ふ場合と雖も、この方面に關する羞恥心といふものを、全然消滅せしむるといふことは如何

なるものであらうか。是等の點に關する考慮も無益ではあるまいと思ふ。指導者は斯る點に就て細心の注意を要することであらうと思ふ。」といふ主張はこれである。これは極めて妥當の見解であつて、如何なる人々も認めねばならない大切な忠告といつてよろしからう。

子供に眞實を教へざるべからず。眞實以外のことは、  
決して教ふべからず。されどまた、完全なる眞實を教  
ふべからず。

——レッシング——



## 第十 性的抑制の必要とその能否

性教育の問題に關聯して、性的抑制の必要と、その能否とが、屢々論議されて來た。勿論、抑制といつても、絶對的の意味ではなくて、相當の年齢まで抑制すべし、而してそれが必要であり、且つ可能であると主張するものである。絶對的の意味になれば、それは抑制といふよりも、むしろ禁絶といふべきもので、それが不必要であり、不可能であり、否むしろ誤りであることは、何人も理解し得るところであらうし、また、私がすでに述べたことによつても、明らかな事實であらう。以下これに關する主なる説を紹介しよう。

一、富士川游氏の説 トルストイ、ウェインゲル等は、性交は罪惡であるとの信仰に基いて、終生禁慾生活を營むべしといふが、これは極端である。併し性交を行つて、衛生上非難すべきことのないときまで、これを制限することは推稱すべきである。倫理學上からいつても、男女が結婚をなすまで、性交を禁ずべきは正當のことである。「二十五歳まで禁制し得れば最大の幸福である」と、エーナ大學の學生を誡めたモリツツアルントの言葉もあるが、これは少しく無理であつて、個人的、社會的、衛生的の見地から、二十歳まで禁制すれば、その後は差支ないと、イワンブロッツチはいつてゐる。

併し文明國に於ては、身體及び精神の成熟が、性慾の成熟より